

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

末木 文美士

序論

一、『三國佛法傳通緣起』について

二、日本三論宗の系譜

凡例

本文並びに注解

序論

一、『三國佛法傳通緣起』について

概念(二二四〇～二二三二)の著『三國佛法傳通緣起』三卷は、インド—中國—日本に亙る佛教史の概論として今日でも廣く用いられているが、本書自體を對象とした注解・研究は極めて少なく、その史料的价值も十分に検討され

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

ていない。本稿は試みにその巻中・日本三論宗の項について検討し、注解を加えようとするものである。それに先立ち、まず本書について概観し、また、日本三論宗の相承系譜における本書の位置づけについて考察しておきたい。

まず、本書の成立については、巻下の終りに、

于時應長元年^(三二一)〈辛亥〉七月五日於東大寺戒壇院述之

華嚴宗沙門 凝念 春秋七十二

造此三國佛法緣起三卷、奉爲觀覽、獻上大覺寺法皇御所、于此御所觀感、以此草本最初寫之畢。

とあるところからその事情が知られる。

本書の刊行については、『國書總目錄』によると、應永六年版・慶長元和古活字版・寛永九年版・刊年不明版がある。^(一三九九)

その他、文化五年の冠導本や明治前期の刊本も幾種類かある(明治九、一〇、一一、一二年。『佛書解説大辭典』參^(一八〇八))

照)。現在一般に流布しているのは『大日本佛教全書』舊101・新62所收本で、その底本は東大寺藏應永二八年刊本だ^(一四二)

という(佛全解題參照)。

この度、筆者が見る機會を得た版本は以下の通りである。

應永六年版(大正大學圖書館藏)

古活字版(東京大學圖書館藏)

寛永九年版(大正大學圖書館藏)

明治十年版(赤松皆恩校訂。私藏)

明治二十一年版(冠導本。東京大學印度哲學研究室藏)

他にも東京大學・大正大學等で見ることのできるものもあるが、今回は書誌的な研究が目的ではないので別の機會に譲る。また詳細な諸版の對校も今回は行なっていないが、全體的に諸版による相違は少ないようである。恐らくこれは應永版がもとになつて、その後の諸版すべて同一の系統であることによると思われる。即ち、應永本の卷末には「戒壇院示觀律師學該乎三藏……仍命工鍍板云爾 應永（己卯）年正月 日」の刊記があるが、これは後の諸版にすべて踏襲されている（佛全本參照。なお、明治版には「應永」以下の年記を缺く）。ただ、明治十年版に「此書古來坊版、文字多魯之誤、且訓點錯謬、幼學苦其難讀矣。余有歎于此、因正誤字、補脫落、施句讀、改訓點、欲使童蒙者易讀也」とあるように、古い版本には魯魚の誤りに屬するものがまま見られる。今、本稿で扱う日本三論宗章に關して、明らかなる字の誤りや異字を除いて、相違のある箇所を擧げると、以下のような箇所がある（最初の數字は本稿の段落番號）。

17 經十七年——應永版・古活字版・寬永版、「經」の下に「七」あり。

18 多寶大塔八丈——すべて「塔」の下に「高」あり。

29 但勝賢一代唯密宗——應永・古活字版、「唯」なし。

最初の「十七年」と「七十七年」は内容的に相違があるが、あとの二つは内容的には大きく相違しない（二番目は「高」があつた方が、最後のは「唯」があつた方がわかり易い）。本稿では便宜上佛全本を底本に用いることにする。

次に、本書に關する注釋・研究を見るに、江戸時代までのものとしては、杉原春洞・瀨邊惠燈の冠導本（文化五年、明治二二年再版）が唯一であろう。明治以後のものとしては、『佛書解説大辭典』によると、以下のものが擧げられる。

三國佛法傳通緣起質問錄 酒井最正 明9

同摘要 藤島了穩 明10

同典據 細川千巖 明12

同講義 廣陵了榮 明13

同講述 吉谷覺壽 明29

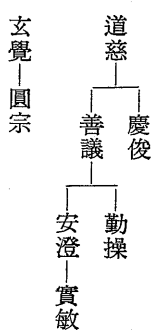
明治十年前後に集中していることは興味深い。本文自體の刊行もこの頃多く行われており、近代的な史的研究に移行する過渡期に本書が重視されたことが知られる。今回は『典據』四卷（東京大學東洋文化研究所藏）を利用した。その後、本書は多く用いられるにもかかわらず、それ自體を對象とする注釋・研究としては、『國譯一切經』和漢撰述部・史傳部16所收の野村耀昌氏の書き下しと注が唯一のものである。その脚注は極めて詳細で便利なものであるが、スペースが限られているために、史料の名稱を出すのみで十分な検討がなされていないのが残念である。

二、日本三論宗の系譜

1 香山宗『大乘三論師資傳』

三論宗の系譜を最も古くまとまつて論述しているのは、香山宗撰『大乘三論師資傳』一巻であろう。本書は長くその存在が知られなかつたが、伊藤隆壽氏が名古屋真福寺所藏本を發見、刊行した（駒大佛敎學部論集12）。伊藤氏は本書の撰者を『一乘佛敎慧日抄』の撰者圓宗（一八八三）と見ており、そうすると九世紀に既に成立していたことになる。今、本書における日本三論宗の相承を圖式化すると次のようになる。

慧灌—福亮等九僧正—神泰—宣融・玄耀・玄叡・道唱



玄覺—圓宗

本書の系譜において注目される第一點は、後には、恐らくは『傳通緣起』の影響下に、三論宗三傳説が定着するが、本書では玄覺の傳を加えて四傳としている點である。後に見るように、三論三傳説は必ずしも自明ではないのである。

第二に、『傳通緣起』などでは、慧灌—福亮—智藏—道慈と、慧灌以後、途切れずにその系譜が傳えられている。ところが、本書では、慧灌・智藏・道慈の系譜はそれぞれ獨立しており、一つにつながっていない。また、慧灌の系統では、神泰が重要な役割を與えられているが、『傳通緣起』などでは、神泰は名前も出て來ない。

なお、本書は後代の三論宗の系譜のもとになるものとして、大きな影響を残している。例えば、『三論祖師傳集』では、ほとんどそっくり本書の日本に関する部分が「三論師資傳云」として引用されている。また、『東大寺要録』5「諸宗事」の三論宗の項も本書の最初の部分、慧灌の系統の箇所とほとんど同じである。『傳通緣起』も日本三論宗の書き出しの部分は本書と極めて類似している（本文1参照）。

因みに、正史などで師承関係が出るのは、『日本後紀』の善議が道慈の嗣であるという記述(本文11注参照)が最初かと思われ、續いて、『性靈集』における勤操の傳(本文21注)にも道慈—善議—勤操の系譜が述べられている。

2 『東大寺要録』

前述のように、『師資傳』の最初の部分にほぼ等しい。

3 珍海『三論玄疏文義要』(正藏70)

卷十の卷末に口傳血脈が載せられ、その日本の部分は次のようになっていいる。

道慈律師 善議大徳 勤操僧正 願曉律師 尊師聖寶僧正 延敏僧都 觀理權大僧都 澄心僧都 在慶律師 有慶大僧都 顯眞 永觀律師 覺樹僧都

智藏僧正流可尋之別記之

ここで注目されるのは以下のような點である。

第一に、『師資傳』と同様、道慈と智藏の系譜をはつきり分けている。智藏系についてはここでは詳細は記していない。また、慧灌系が出ていないが、既にこの頃、この系統は力が弱くなつていたためかとも思われる。

第二に、『師資傳』や『傳通縁起』では、願曉は智藏系の藥寶の嗣とするが、ここでは道慈系の勤操を承けているものとする。ここでは智藏系が略されているが、もしそれがあれば、藥寶—願曉の相承が記されていたとも考えられる。そうすると、史實はともかく、願曉の嗣聖寶にはじまる東南院三論が智藏・道慈の兩系統を承けていることが示

されることになる。この點、後の『東大寺具書』などにはつきりするが、珍海においてもそのように見られていたと考えられる史料がある。それは聖寶の傳『尊師御一期日記』に「私云」として記されるもので（日史1-4、七八頁）、珍海記也三論師宗相傳云、道慈律師、善議大德、勤操僧正、願曉律師、聖寶僧正。又智藏、智光、靈數（數之）、藥寶法師、願曉相承。合案、願曉律師者、一説云、道慈之流、一説云、智藏之流也。若爾、此師歷二家受學歟。可尋之。とある。

第三に、聖寶以下の東南院の系譜に關し、院主の次第とは異なる法脈を掲げている。この點、後の『内典塵露章』などに詳しく展開されている。

4 『三論祖師傳集』（佛全）

三卷のうち、卷下が終つたさらに後に「日本祖師」とあり、まず「三論師資傳云」として、ほとんど『師資傳』と同文を引く。次に惠灌・道慈・善議・安澄・勤操及び聖寶以下の東南院の院主の傳を出す。三十三代まで載せるが、第十二代道慶（一八九七）（文治五年隱遁）まで詳しく、原形の成立の年代をうかがわせる。因みに、卷中には建仁四年（二〇四）の識語がある。惠灌・智藏・道慈にはそれぞれ第一・第二・第三とあり、三論三傳説が形成されていたことがうかがわれる。また、道慈・善議・安澄・勤操・聖寶と、道慈系が重視されている點が注目される。概念のものでは、聖寶へ連なる系譜は智藏系が重視されており、二つの傾向の違いが注目される。

なお、『祖師傳集』と類似したものに『三論祖師傳』があり（佛全）、記述の體裁やとりあげている人物はほぼ同じであるが、内容的にはかなり異なり、時代も降るものと思われる。

5 擬念『八宗綱要』

擬念のもので、『八宗綱要』『内典塵露章』『傳通緣起』などで具略の相違があり、内容的にも多少違っている。本書における日本三論の系譜を表示すると次のようになる。

吉藏—慧灌—福亮—智藏—道慈—善議—勤操—安澄

└─ 頼光

その特徴を見ると、以下の點が擧げられる。

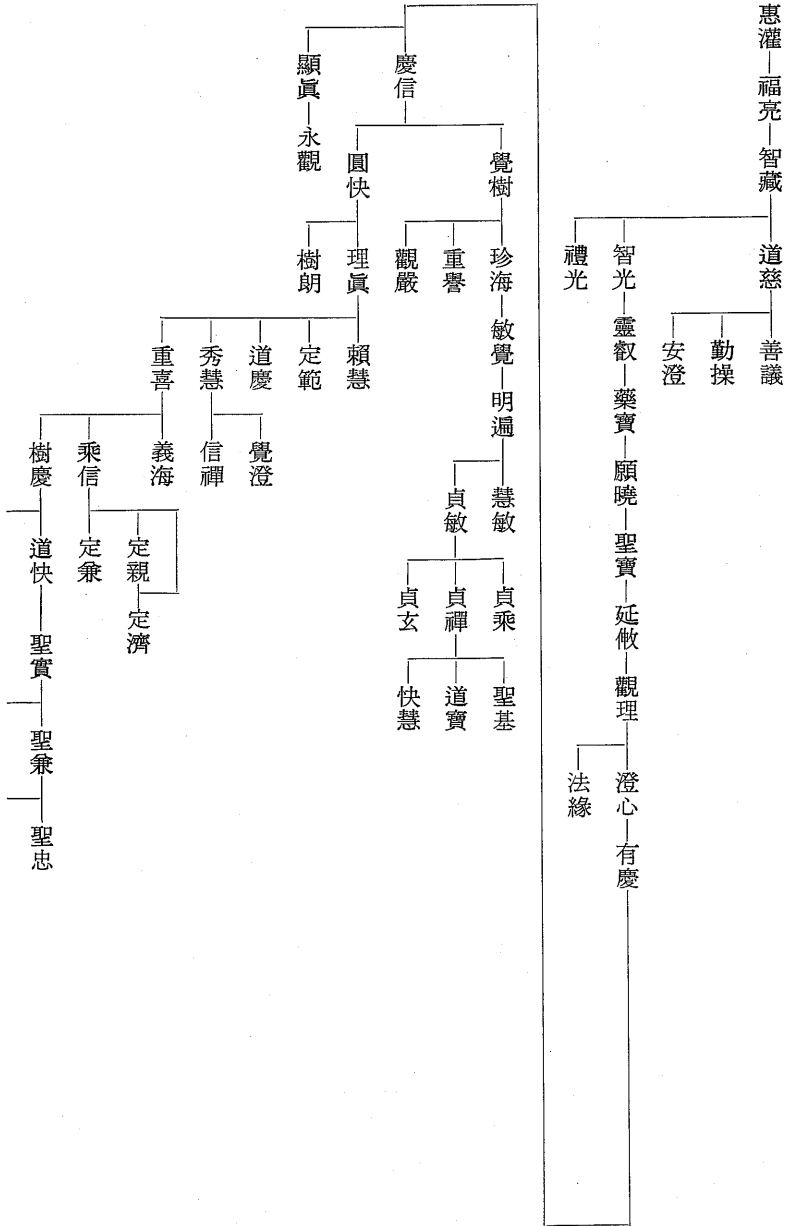
第一に、ここではじめて慧灌—福亮—智藏—道慈という系譜が見える。これは『東大寺具書』や『元亨釋書』でも言われるから、鎌倉時代中・後期にはほぼ確立していたと思われる。ただし、ここでは三傳説は言われていない。三傳説がはつきり見えるのは、『塵露章』『傳通緣起』や先の『三論祖師傳集』などである。

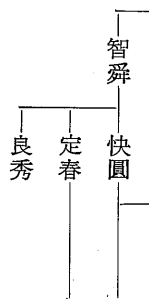
第二に、『師資傳』に見えた神泰以下に續く慧灌系が見えない。これは擬念のものすべてに共通し、以後『東大寺具書』などを除いてほとんどこの系統は無視されてゆく。また、ここには智藏の弟子に智光の名も見えず、その系統も略されており、従つて、道慈系が中心になつている。

第三に、本書では善議—勤操—安澄となつており、諸書が多く勤操・安澄を共に善議の弟子とするのと異なつている。本書の系譜はやや無理のように思われる(本文21注参照)。

6 同『内典塵露章』(佛全)

日本三論の系譜が詳しく、特に聖寶以後の東南院の法脈が詳しい。表示すると以下の通り。

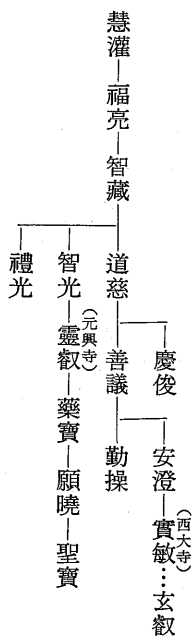




本書の注目される點を擧げると、第一に、明白に「三論即有三傳」と三傳が言われていることである。第二に、道慈と智光の二系統を擧げ、この點「傳通緣起」とほぼ同じであるが、ただ、道慈の後がはつきりしない。「善議・勤操・安澄(等カ)寺諸德、皆大安寺即道慈門葉也」とあるが、必ずしも三人が道慈の直接の門下というわけではなく、道慈—善議—勤操—安澄という系譜をも許容しているとも考えられる。第三に、聖寶以下の東南院の系譜に關し、院務法第一と受法の相承を分けて擧げている。院務次第については本文29の注を参照。ここでは受法の相承についてのみ表にして掲げておいた。この點に關しては、諸書中最も詳しい。

7 同『三國佛法傳通緣起』

本書に見られる相承關係を表示すると以下の通り。



(法隆寺) 道詮・貞玄

(聖寶以後) 中古學英——永觀・珍海・樹朗・重譽

近代明哲——明通・貞敏・秀慧・覺澄

その後——樹慶・智舜・快圓・定春

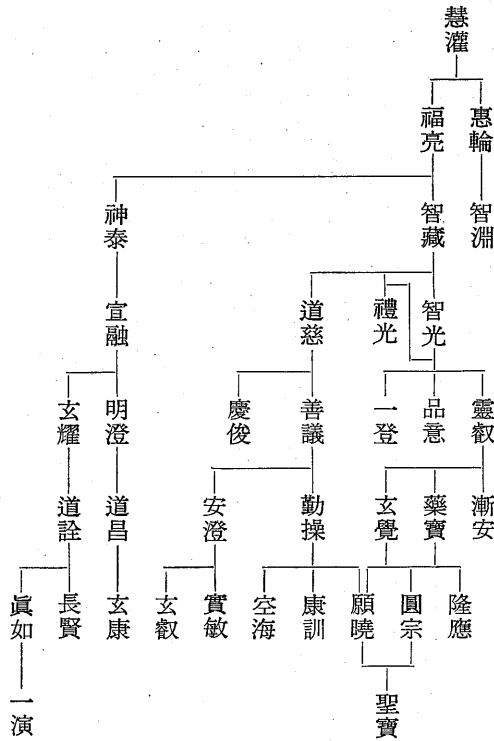
本書は諸寺の三論を擧げる箇所、聖寶以後の論述などでは必ずしも系譜として示していない。本書で問題になるのは實敏と玄叡の關係が不明である點(本文23の注參照)、願曉が藥寶の系統にのみ位置づけられ、勤操―藥寶の系譜が示されていない點(これは『塵露章』も同じ)などである。

本書は從來極めて重視され、本書の系譜が權威あるかのように考えられているが、これまで見てきたように、本書の相承系譜に至るまでの變遷があり、本書のみが特に重視される必然性はない。

因みに、本書はこの日本三論宗の項を見るに、必ずしも十分に推蔽されたものとは言えず、本文1―11で一度三論三傳を述べ、特に道慈と善無畏の關係などに觸れた後、再び本文12以下で三傳を述べ、18―20で善無畏來日について記している。しかも3で孝德天皇の代に慧灌が僧正になつたとしながら、13で孝德天皇の大化二年に慧師等が僧正になつたと言うのは、矛盾とは言えないまでも不自然である。異なつた系統の史料をそのまま接合したために生じた重複や不自然さではないだろうか。また、今日から見れば荒唐無稽とも言える善無畏來日について大きなスペースをとつて考證している點など、本書の中世的性格を示すものとして興味深い。

8 『東大寺具書』(續群)

本書は醍醐寺との諍いに際して東大寺の優位を示す爲に著わされたもので、^(一三—一五)正和四年の記年がある。その中で三論宗の系譜も大きく扱われている。本書に記された系譜は聖寶以前に關して凝念のもの以上に詳しい。以下それを表示する。



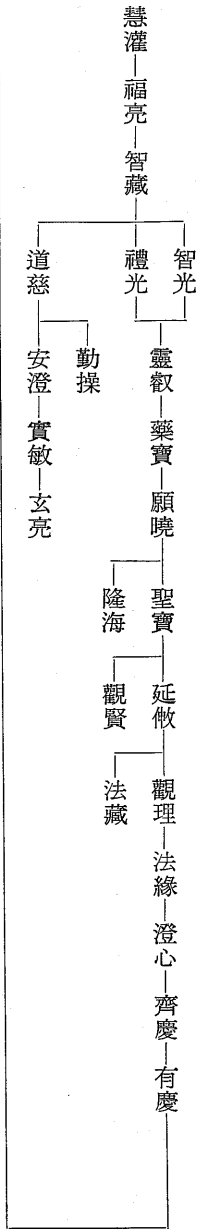
本書の系譜は極めて複雑に入り組んでいるが、主な特徴として、神泰系についてもかなり詳しく記していること、願曉—聖寶が智光系と道慈系の兩方を承けているとされていることなどが挙げられよう。

9 師鍊『元亨釋書』

本書には特に相承系譜を出していないが、卷二七・諸宗志においては、「我本朝慧灌諭喝始矣。智藏系授長矣」と慧灌・智藏のみ挙げ、卷一・傳智の項でも慧灌・智藏のみ挙げ、道慈は卷二・慧解の中で扱われている。ここから師鍊は必ずしも三傳説をとつていなかつたと考えられる。

付、『頭書三論玄義』所收「三論源流」

參考までに江戸時代の宗脈圖の例として元祿十四年刊『頭書三論玄義』(東京大學印度哲學研究室藏)の「三論源流」の圖から日本の部分を引いておこう。なお、しばしば今日でも用いられる『諸嗣宗脈紀』(東京大學圖書館藏)も日本に關する部分は本書と全く同一である。



なお、明治以後も前田慧雲『三論宗綱要』、境野黄洋『日本佛教史講話』、島地大等『日本佛教教學史』、宇井伯壽『日本佛教概史』など、全體または部分に關する系譜圖を載せる文献は少くない。しかし、上述のように、相承に

關しては古い時代からいろいろ説があり、事實の問題であると同時に、様々な意圖の下に相承が作られていく側面があることも忘れてはならないであろう。

凡例

- 一、以下は凝念『三國佛法傳通緣起』卷中・日本三論宗の項の本文並びに注である。
 - 二、本文は『大日本佛教全書』所收本に據つた。他の諸版も參考にしたが、本文校訂が目的ではないので、特に問題のある箇所以外指摘しなかつた。
 - 三、本文は便宜上段落に分け、1～32の番號を振つた。句讀點を打ち、人名に傍線を引いて讀解の便を計つたが、返點・送り假名は附さなかつた。
 - 四、注は各段落に、主として人物に關する關連史料の提示に主眼を置いた。従つて、一般語彙などには特に注を附さなかつた。また、史料を提示した後、その問題點について(私謂)として簡単にコメントを附した。
 - 五、注の史料は漢文の場合、本文と同様に句讀點を打ち、人名に傍線を引いたが、返點・送り假名は附さなかつた。
 - 六、史料その他の略稱は以下の通り。
- 紀—日本書紀 續紀—續日本紀 後紀—日本後紀 續後紀—續日本後紀 文德實錄—日本文德天皇實錄 三代實錄—日本三代實錄 紀略—日本紀略 類國—類聚國史 師資傳—三論師資傳 要錄—東大寺要錄 補任—僧綱補任(興福寺本) 補抄—僧綱補任抄出 扶略—扶桑略記 傳來次第—佛法傳來次第 七大—七大寺年表 要文抄

—日本高僧傳要文抄 具書—東大寺具書 塵露—內典塵露章 元釋—元亨釋書 祖傳集—三論祖師傳集 祖師傳
—三論祖師傳 續要錄—東大寺續要錄 三定—三會定一記 圓照行狀—東大寺圓照上人行狀 南高—南都高僧傳
東高—東國高僧傳 本高—本朝高僧傳 淨土源流—淨土法門源流章 寧遺—寧樂遺文 平遺—平安遺文 鎌遺—
鎌倉遺文 日古—大日本古文書 日史—大日本史料 長西錄—淨土依憑經律論章疏目錄 安遠錄—三論宗章疏
永超錄—東域傳燈目錄 謙順錄—諸宗章疏錄 正藏—大正新脩大藏經 日藏—日本大藏經 佛全—大日本佛教全
書 群類—群書類從 續群—續群書類從 續々群—續々群書類從

七、筆者は昭和五七年度、學習院大學文學部史學科において非常勤講師として國史學特講を擔當したが、その際本書の日本三論宗・法相宗の項を講讀した。本稿はその際のノートをもとにまとめたものである。その際、お世話になった先生方及び學生諸氏に感謝したい。又、原稿段階で就實女子大講師會根正人氏に通覽して頂き、問題点を指摘して頂いた。合せて感謝したい。

1 百濟佛法傳日域後、至推古天皇御宇三十三^(六二五)年乙酉、經七十四年。當大唐高祖武德八年。此年高麗國王貢僧慧灌來朝。此乃三論學者。隨大唐嘉祥大師、受學三論、而來日本。是日域界三論始祖。而未講三論、裹玉而未開。

。慧灌（惠灌・慧觀）

〔紀22〕〔推古卅三年〕卅三年春正月壬申朔戊寅、高麗王貢僧惠灌。仍任僧正。

〔師資傳〕後傳日本。維人王第三十磯嶋金刺宮欽明天皇治天下天國押開廣庭天皇之代、百濟國獻佛法。自爾以後、經

世七代、過年九十餘歲、雖有佛法、未有弘宣。第三十七難破長浦豐前宮孝德天皇治天下萬豐日天皇、乃請元興寺僧高麗國慧觀法師、令講三論。其講了日、天皇即拜任以僧正。是則日本僧正第二。

〔要錄5〕(師資傳にほぼ同じ)

〔補抄上〕(推古三十三年)僧正惠灌(正月壬申日任。高麗僧也。元興寺三論供)。本文云。天下旱魏。令着青衣、令講三論。已甘露降、仍賞任僧正。本元興寺、流布三論宗法門。即建立河內國志紀郡井上寺、本願。

〔扶略4〕(推古)卅三年乙酉。天下旱魃。以高麗僧慧灌、令着青衣、講讀三論。甘雨已降、仍賞任僧正。住元興寺、流布三論法門。建井上寺。

〔傳來次第〕(推古)三十三年乙酉、天下旱魃。高麗僧慧灌、奉勅、著青衣談三論。甘雨降、賞任僧正。住元興寺、流布三論宗。(布衣)

〔具書〕人王第三十七代難波長浦豐前宮御宇 孝德天皇治天下、依天下旱魃、召囑本元興寺高麗貢僧惠灌法師(嘉祥大師弟子)、依異朝道朗例、令着青衣講三論。講了甘雨降。仍賜賞之日、任以僧正、即依宜流布三論。

〔八宗綱要〕(嘉祥)遂以三論授高麗慧灌僧正。僧正來日本、廣傳此宗。

〔塵露章〕至日本三論者、由來尙矣。昔推古天皇御宇、高麗僧慧觀僧正、入唐承宗嘉祥大師、即傳此國。在元興寺(本元興寺)。至孝德天皇御宇、即請慧觀、令講三論。

〔元釋1〕釋慧灌、高麗國人。入隋受嘉祥吉藏三論之旨。推古三十有三年乙酉春正月、本國貢來。勅住元興寺。其夏天下大旱、詔灌祈雨。灌著青衣講三論。大雨便下。上大悅、擢爲僧正。後於內州創井上寺、弘三論宗。

〔同20〕(推古三十三年)春正月高麗國貢沙門慧灌。夏釋慧灌擢僧正。

〔祖傳集〕（補抄にほぼ同じ）

〔祖師傳〕（元釋にほぼ同じ）

〔本高一〕（略）

〔私謂〕以上の諸史料を較べ合せるに、二つの系統があることが知られる。即ち、(1)直ちに僧正に任ぜられたとするもの、(2)孝徳天皇の代に三論を講じ、僧正に任ぜられたとするもの、の二つである。

(1)の最も古いものは紀で、後に補抄・扶略・傳來次第・元釋・本高などに承け繼がれる。また、紀では單に僧正に任ぜられたことのみ記されているのに對し、後の史料では、いずれも天下が早尅であつたため、青衣を著して三論を講じ、それによつて雨が降つたので、僧正に任ぜられたことになつてゐる。青衣の件は、具書に言うように、吉藏の師道朗（法朗）の故事（唐高僧傳7）に倣うもので、慧灌を三論宗に結びつける作意によると思はれる。

それに對し、(2)は、師資傳が最も古く、要録や具書、凝念の諸著作に承け繼がれるもので、東大寺系の傳承と考えられる。特に具書は、天下が早尅であつた時に青衣を着して三論を講じたという(1)の系統の話をそのままもつてきて年代だけかへている。

本書（傳通緣起）は當然(2)の立場に立つが、(1)の傳承も知つており、會通を試みようとしてゐる（4・5）。なお、最も古い史料である紀には、慧灌が三論宗なることは見えず、まして吉藏の法を承けたことは記されていない。特に後者に關しては、年代的に見れば、吉藏の在世が五四九〜六二三であるから、不可能ではないが、凝念のものや具書・元釋など、鎌倉期それも後期の著作にはじめて見えることを考えると、疑問としなければなら

らない。そもそも慧灌の三論初傳ということについてさえ、序説に見たように、必ずしも確定しているわけではない。

なお、補任には慧灌の記事が缺けているように見えるが、興福寺本では、推古卅二年僧正觀勒・僧都鞍部德積の後に、

三論供本文云天下旱魃令

任僧□流

とあり、これが慧灌の記事の殘缺と思われる。

2 従此前年、觀勒法師自百濟國來。此亦三論宗之法匠。亦未講通法教。

。觀勒

〔紀22〕^(六〇二)〔推古十年〕冬十月、百濟僧觀勒來之。仍貢曆本及天文地理書、并遁甲方術之書也。

〔同〕^(六二四)〔推古〕卅二年夏四月丙午朔戊申、^(三三)有一僧、執斧毆祖父。時天皇聞之大臣、詔之曰。夫出家者頓歸三寶、具懷

戒法何無懺忌、輒犯惡逆。今朕聞、有僧以毆祖父。故悉聚諸寺僧尼、以推問之。若事實者、重罪之。於是、集諸僧尼而推之、則惡逆僧及諸僧尼、並將罪。於是、百濟觀勒僧、表上以言。夫佛法、自西國至于漢、經三百歲、乃傳之至於百濟國、而僅一百年矣。然我王聞日本天皇之賢哲、而貢上佛像及內典、未滿百歲。故當今時、以僧尼未習法律、輒犯惡逆。是以、諸僧尼惶懼、以不知所如。仰願、其餘惡逆者以外僧尼、悉赦而勿罪。是大功德也。天皇

乃聽之。^(十一月)○戊午、詔曰、夫道人尙犯法、何以誨俗人。故自今已後、任僧正僧都、仍應檢校僧尼。○壬戌^(十七日)、以觀勒僧爲僧正。以鞍部德積爲僧都。即日、以阿曇連〈闕名〉爲法頭。

〔聖德太子傳曆上〕（推古十年）冬十月、百濟僧觀勒來、仍貢曆本及天文地理遁甲方術之書也。……太子聞之、謂左右曰、吾昔在衡山修行也、此僧爲吾弟子。在吾左右、常言七曜度數、山河利害之事。吾以小術、疾而去之。而猶追來。

〔上宮聖德法王帝說〕（裏書）觀勒僧正、推古天皇之即位十年壬戌來會〈云云〉。

〔師資傳〕（慧觀僧正任命に關して）同寺三論觀勒僧正其第一矣。

〔要錄5〕（惠灌僧正任命に關して）觀勒僧正其第一矣。

〔補任1〕（推古卅二年）僧正觀勒（四月壬戌日任。百濟國人。同天皇第十年壬戌自百濟國來。曆道・天文・遁甲三道、此人傳來〔因聖德太子曰、吾在衡山之時、此僧爲弟子〕）

〔補抄上〕（補任とほぼ同じ）

〔扶略3〕（推古十年來日の件。紀にほぼ同じも、十一月とする）

〔同4〕（推古卅二年、僧正任命の件）

〔傳來次第〕（推古三十二年）四月、以百濟僧觀勒始任僧正。此時本朝寺四十六所、僧八百六十人、尼五百六十九人。僧正觀勒云。佛法自西至漢土、歷三百歲。傳之至百濟國、僅一百歲。至日本、七十二年〈云云〉。

〔元釋16〕釋觀勒、百濟人。推古十年十月貢來。有學術、獻曆本及天文地理方術之書。太子耳聰曰。吾在衡山、勒爲弟子。好星宿度數山河利害事。我呵其涉藝術雜真乘。夙因不竭、追我而來、猶言星曆。三十二年四月、有沙門殺

祖父者。朝廷初置僧正、檢校僧尼。勒當遴選爲僧正。

〔同20〕（來日及び僧正の件）

〔本高1〕（略）

〔私謂〕觀勒に關する史料は、(1)來日（推古十年）、(2)僧正就任（同三十二年）の二つが主であり、前者と關連して、聖德太子との關係を説く傳説（太子傳曆など）が擧げられる。ところで、觀勒が三論宗であつたことは、師資傳などに見えるが、少數の史料に見えるのみで疑わしく、本書にも「未講通法教」とあるように、實際の教理面での活動はなかつたと思われる。

3 至第三十七代聖主孝德天皇御宇、乃請元興寺僧高麗慧灌法師、令講三論。其講竟日、任以僧正。此乃日本僧正第二。
〔第一僧正同寺觀勒〕

。慧灌僧正任命 既出（1）

。觀勒僧正任命 既出（2）

〔私謂〕このあたりの記事の書き方は明らかに師資傳や要録などと近似しており、それらの史料・傳承にのつとつて書かれている。

4 然僧綱補任記云。慧灌（或作觀字）法師、第三十四代推古天皇御宇三十三年、任僧正焉。有此異說。

。慧灌僧正の異説

〔私謂〕『僧綱補任記』は未詳。但し、この記事は既出(1)の補抄などに見える。

5若會異説、本元興寺有九僧正。謂慧觀・觀勒・慧師・慧輪等、前後補任。此等僧徒、皆爲聽衆講論竟日、摠預勸賞、多人任僧正焉。

。九僧正

〔師資傳〕從此以後、福亮法師等九僧正、皆此元興寺三論宗也。

〔要録5〕福亮法師等九人、皆三論宗也。

〔具書〕(惠灌)僧正弟子、福亮・惠輪・智圓・智通・惠施・高麗惠師六人、僧正惠雲・常安・靈雲・惠隱・惠至・

道登・僧旻・惠妙・惠隣九人法師、皆在本元興寺、弘三論宗、陪(孝徳天皇)豊前禁内講三論文。百濟惠宗法師又以同之。

〔私謂〕九僧正のうち、本文に四名(慧觀・觀勒・慧師・慧輪)の名が見え、師資傳・要録により福亮が加わる。本

書の「九僧正」は明らかにこれらの傳承を承けたものである。以上の五名のうち、慧觀(灌)・觀勒は既出(1・

3)、福亮は後出(6)、慧師・慧輪は次に掲げる補任等に出る。

具書はやや特異で、福亮等六人と惠雲等九人を擧げ、いずれも惠(慧)灌の弟子で本元興寺の三論宗とする。最初の六人のうち、福亮・惠施以外は天武元年の僧正に名が見え(後掲の補任等)、惠雲等九人は、惠隱を除いて大化元年の十師(後掲の紀)に名が出る。具書はこれらをまとめてすべて慧灌の弟子で本元興寺三論宗とするが、

勿論これは信じられない。

そのうち、ここでは傳通緣起本文の九師の理解に資すると思われる智圓・智通・惠施・惠雲について簡單に見ておくと、智圓は本高（後掲）によると元興寺三論宗だが、智通は法相宗第二傳とされる人、また、惠施は文武二年以來僧正となつているが（補任等）、元興寺三論との關係は明らかでない。惠雲は具書に僧正とあるが、補任等には記載がない。従つて、先の九師のうちの不明の僧を補うものとしては、ひとまず智圓が考えられるだけである。

なお、傳通緣起本文で「爲聽衆講論竟日、摠預勸賞、多人任僧正焉」という點は他の史料で確認できず、慧灌の場合を模した書き加えと思われる。

ところで、疑念はここで異説を會通すると言つては、實際には會通というよりは、「此等僧徒、皆爲聽衆講論竟日、摠預勸賞、多人任僧正矣」という點を擧げて、慧灌の孝德天皇御宇僧正任命説を補強しようとしているようである。

。慧師・慧輪

〔補任一〕（天武天皇二年・僧正）
（六七三）

惠師〈三月日住。高麗人。鞍部氏〉

智藏〈同日任。吳國人。福亮在俗時子也〉

惠輸〈大原氏〉

智圓〈鞍部氏〉

智遍〈唐學生。湯坐氏〉

〔補抄上〕（補任に同じ。但し、惠輸は惠輪、智遍は「智通〈唐學生。平城觀音寺、此僧正建立〉」

〔本高72〕和州元興寺沙門慧雲傳

釋慧雲、超海入唐。謁嘉祥吉藏三藏、受空宗。歸居元興寺。孝德帝、選用十師之日、雲當其銓。又、常安・慧隣、共入中華、傳吉藏大師之法。歸來住元興寺。預十師數。敎衆演宗。

〔同〕和州元興寺沙門智圓傳

釋智圓、推古末年、與同志數人入唐。從嘉祥寺吉藏三藏、傳受三論。附唐使歸。住元興寺、說嘉祥大師之法。釋慧師、就吉藏大師、承空宗。歸住元興寺。白鳳二年、勅舉智圓・慧師及慧隣爲僧正。

〔紀25〕（大化元年八月八日）故以沙門狛大法師・福亮・惠雲・常安・靈雲・惠至・（持主）僧旻・道登・惠隣・惠妙、而爲十師。別以惠妙法師、爲百濟寺々主。此十師等、宜能敎導衆僧、修行釋教、要使如法。

〔同〕（白雉三年）夏四月戊子朔壬寅、請沙門惠隱於內裏、使講無量壽經。以沙門惠資、爲論議者。以沙門一千、爲作聽衆。

〔私謂〕慧師は紀・大化元年の十師の惠至と同一と思われる。白雉三年の惠資とも同一かと推定されている（古典文學大系『日本書紀』頭注・古代人名辭典等）。慧輪は補任には惠輸とあるが、筆誤であろう。紀・大化元年の十師の惠隣と同一と思われ、本高でも兩者を同一視している。

大化元年の十師のうち、狛法師については、次の福亮と同一視する説もあるが、近年は慧灌と同一視されることが多い（辻善之助『日本佛教史』上世篇、八四頁。他、田村圓澄氏、井上光貞氏）。慧灌は前出（1）、福亮は

後出(6)。他の八師のうち、七師は本高72に傳が纏められている(僧旻は同67)。いずれも元興寺住僧で三論宗の人、吉藏より學んだとある。但し、特に吉藏から受學の件については全く信用できない。

天武二年の僧正五師のうち、智藏は後出(7)。智圓は本高72によると元興寺三論。智遍は恐らく補抄の智通が適當で、法相宗第二傳の人。なお、扶略5では、智藏の僧正任命のみ擧げる(後出・7)。

6 慧灌僧正、以三論宗授福亮僧正。

。福亮

〔紀25〕(大化元年。十師の一。前出・5)。

〔法起寺塔露盤銘〕至于戊戌年、福亮僧正、聖德御分、敬造彌勒像一軀、構立金堂。(寧下)^(六三八)

〔師資傳〕從此以後、福亮法師等九僧正、皆此元興寺三論宗也。

〔要錄5〕福亮法師等九人、皆三論宗也。

〔補抄上〕(年代不明。推古三十三年の慧灌のあと)僧正福亮(吳人。熊凝氏。本元興寺)。維摩緣起云。大織官内大臣、以齊明天皇四年(戊午)、於山科陶原家、囑福亮法師、爲講匠(云云)。

〔扶略4〕(齊明四年)^(六五九)同年、中臣鎌子、於山科陶原家、屈請吳僧元興寺福亮法師(後任僧正)、爲其講匠、甫演維摩

經奥旨。

〔佛法傳來次第〕(ほぼ扶略に同じ)

〔八宗綱要〕慧灌授福亮僧正。

〔塵露〕觀公授于福亮僧正。

〔元釋16〕釋福亮、吳國人。受三論于嘉祥。齊明四年、内臣鎌子、於陶原家精舍、請亮講維摩詰經。

〔多武峯緣起〕（齊明）四年（戊午）内臣、於山階陶原家請異僧元興寺福亮法師（後任僧正）爲講師、甫演維摩經奥旨。

〔本高1〕和州元興寺福亮傳

釋福亮、姓熊凝氏。本吳國人、來朝出家。從高麗慧灌僧正、習稟三論、兼善法相。又入支那、謁嘉祥師、重研本宗。住元興寺、熾唱空宗。勅任僧正。齊明四年、大織官鎌足公、於山科陶原家、新建精舍。延亮講淨名經。是南都維摩會之權輿也。

〔私謂〕慧灌から福亮への傳法については、凝念や具書（前出）以外、古い史料に見えない。また、吉藏からの受法も元釋以外、古い史料に見えず、疑問である。まして、本高のように來日後慧灌につき、再び渡海して吉藏に就いたとするのは年代的にも合わず、自ら虚偽を暴露している。井上光貞氏は、法起寺塔露盤銘等から、聖德太子との關係を推測している（『日本古代思想史の研究』、二〇五～八頁）。

なお、法起寺塔露盤銘が信用できるとするならば、孝德天皇の代に第二代の僧正となつたという説は合わないことになる。

7 福亮授智藏僧正。智藏越海入唐、重傳三論。遂之歸朝、弘通所傳。是第二傳也。

。智藏

〔懷風藻〕智藏師者、俗姓不田氏。淡海帝世、遣學唐國。時吳越之間、有高學之尼、法師就尼受業。六七年中、學業穎秀、同伴僧等、頗有忌害之心。法師察之、計全軀之法。遂被髮陽狂、奔蕩道路。密寫三藏要義、盛以木筒。著漆祕封、負擔遊行。同伴輕蔑、以爲鬼狂、遂不爲害。太后天皇世、師向本朝。同伴登陸、曝涼經書。法師開襟對風曰。我亦曝涼經典之奧義。衆皆嗤笑、以爲妖言。臨於試業、昇座敷演。辭義峻遠、音詞雅麗。論雖蜂起、應對如流。皆屈服、莫不驚駭。帝嘉之、拜僧正。時歲七十三。

五言、翫花鶯、一首(略)

五言、秋日言志、一首(略)

〔師資傳〕次入唐學生吳智藏僧正。亦此元興。寺業涉內外、學道三藏。於法隆寺、傳三論。

〔補任1〕(天武二年)^(六七三)僧正智藏(同日任。吳國人。福亮在俗時子也)(前出)。

〔補抄上〕(補任に同じ)

〔扶略5〕(天武二年三月)同月、智藏任僧正。吳學生。福亮僧正在俗時子也。

〔具書〕福亮僧正弟子學生、智藏并神泰法師、又元興寺人。天武天皇御宇入唐歸朝之後、於法隆寺弘三論。

〔八宗綱要〕福亮授智藏僧正。

〔塵露〕亮公授于智藏僧正。藏公入唐、重傳三論、歸朝弘通。

〔元釋1〕釋智藏、吳國人。福亮法師在俗時子也。謁嘉祥受三論微旨。入此土居法隆寺、盛唱空宗。白鳳元年、爲僧正。道慈・智光、皆藏之徒也。

〔同21〕(天武二年) 勅於川原寺寫於大藏經。沙門智藏督役。故任僧正。

〔祖傳集〕○第二 僧正智藏(天武天皇治二年三月任僧正。吳學生。福亮僧正在俗時子也)

〔祖師傳A〕次吳智藏、初隨慧灌、於元興寺而研三論。識涉内外、學通三藏。却後入唐、定慧倍進。未幾而歸朝、於法隆寺弘三論宗。

〔祖師傳B〕(元釋に近い)

〔本高1〕和州法隆寺沙門智藏傳

釋智藏者、吳國人。福亮法師在俗時之子。少隨慧灌僧正於元興寺、習究空論之旨。又入唐國、質餘蘊。歸住法隆寺、講誘衆僧。白鳳元年、詔任僧正。不記其終。大安寺道慈、元興寺智光・禮光、藏之徒也。又釋神泰、受三論於福亮。居元興寺、爲衆開講。名伴智藏。有弟子宜融一人、宗付相續、至于六世矣。

〔私謂〕智藏は三論宗第二傳とされるが、その事蹟は必ずしも明らかでない。まず、福亮との關係であるが、諸史料に「福亮在俗時之子」とあるところを見れば、一應、福亮からの受法が認められるとしても、それを明白に述べた古い史料はない。かえつて、師資傳では、福亮の弟子として神泰を挙げ、その嗣として宜融・玄耀・玄叡・道唱の名を出し、それとは別に智藏を出し、智藏と福亮の關係を言わない。要略も福亮―神泰の系譜のみ挙げる。具書は福亮・神泰を併列している。ところが、概念のものでは福亮―智藏の系譜のみ挙げ、神泰の名は見えない。

次に、三論宗の將來であるが、懷風藻によると、淡海帝(天智天皇)の代に入唐し、六、七年在唐後、太后天皇(天智の後の倭姫か。井上光貞『日本古代思想史の研究』二〇九頁参照)歸國した。井上氏によると、天智四年(六六五)入唐、同十年(六七二)歸國である。しかし、唐において就學したのは「高學之尼」であり、名も

知られていない。當時即ち吉藏没後で、三論の教學は衰微していたと思われ、その傳承は必ずしも明白でない。なお、本書の智藏と懷風藻の智藏を別人とする説もある（田村圓澄『飛鳥・白鳳佛敎論』一四七頁）。

8 智藏投法道慈律師。道慈第四十二代聖主文武天皇御宇大寶元年辛丑、越海入唐、摠傳六宗、三論爲本。在唐學法一十八年、第四十四代元正天皇御宇養老二年戊午、道慈歸朝。此年遷都於奈良、經十一年。

。道慈

〔續紀8〕（養老三年）十一月乙卯朔、詔僧綱曰。朕聞。優能崇智、有國者所先。勸善駢學、爲君者所務。於俗既有、於道宜然。……道慈法師、遠涉蒼波、覈異聞於絕境、遐遊赤縣、研妙機於祕記。參跡象龍、振英秦漢。並以戒珠如懷滿月、慧水若寫滄溟。儻使天下桑門智行如此者、豈不殖善根之福田、渡苦海之寶筏。朕每嘉歎不能已也。宜施食封各五十戶、並標揚優賞、用彰有德。

〔同10〕（天平元年十月）甲子、以辨淨法師爲大僧都。神叡法師爲少僧都。道慈法師爲律師。

〔同12〕（天平八年）二月丁巳、入唐學問僧玄昉法師、施封一百戶、田一十町、扶翼童子八人。律師道慈法師、扶翼童子六人。

〔同〕（天平九年四月）壬子、律師道慈言。道慈奉天勅、住此大安寺。修造以來、於此伽藍、恐有災事、私調淨行僧等、每年令轉大般若經一部六百卷。因此雖有雷聲、無所災害。請自今以後撮取諸國進調庸各三段物、以宛布施、請僧百五十人、令轉此經。伏願、護寺鎮國、平安聖朝、以此功德、永爲恒例。勅許之。

〔同〕（天平九年十月）丙寅、講金光明最勝王經于大極殿。朝廷之儀一同元日。請律師道慈爲講師、堅藏爲讀師。聽衆一百、沙彌一百。

〔同15〕（天平十六年）

（七四四）

冬十月辛卯、律師道慈法師卒（天平元年、爲律師）。法師俗姓額田氏、添下郡人也。性聰悟、

爲衆所推。大寶元年、

（七〇一）

隨使入唐。涉覽經典、尤精三論。養老二年歸朝。是時、釋門之秀者、唯法師及神叡法師二

（七一八）

人而已。著述愚志一卷、論僧尼之事。其略曰。今察日本素縊行佛法、軌模全異大唐道俗傳聖教法則。若順經典、

能護國土、如違憲章、不利人民。一國佛法、萬家修善、何用虛設。豈不慎乎。弟子傳業者、于今不絕。屬遷造大安

寺於平城。勅法師、勾當其事。法師尤妙工巧、構作形製、皆稟其規摹。所有匠手、莫不歎服焉。卒時年七十有餘。

〔懷風藻〕釋道慈者、俗姓額田氏、添下人。少而出家、聰敏好學。英材明悟、爲衆所推。大寶元年、遣學唐國。歷訪

明哲、留連講肆。妙通三藏之玄宗、廣談五明之微旨。時唐簡于國中義學高僧一百人、請入宮中、令講仁王般若。

法師學業頗秀、預入選中。唐王憐其遠學、特加優賞。遊學西土、十有六歲。養老二年、歸來本國。帝嘉之、拜僧

綱律師。性甚骨鯁、爲時不容。解任歸、遊山野。時出京師、造大安寺。年七十餘。

五言、在唐奉本國皇太子。一首（略）

五言、初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭。一首（略）

〔大安寺碑〕其後、和銅三年歲次庚戌、皇朝遷于乃樂之京、伽藍亦隨同時遷。然彼火災時、猶不輟架築之事、歷歷未

成。爰有道慈律師、梵門之領袖也。幼挺悟聰、夙彰貞敏。往遊唐國十有七年、學完五明、智洞三藏。粵以天平元

年歲次己巳、詔遣法師、修營此寺。法師以爲不滅妖火、功業難成。於是無上表、請爲寺業、每年四月、設般若會。

天皇嘉之、制詔有司親族寺物、官供其事。自爾以來、火難絕矣。（寶龜六年四月十月。寧遺下）

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕

一帳大般若四處十六會圖像

一帳華嚴七處九會圖像

右以天平十四年歲次壬午、奉爲十代 天皇、前律師道慈法師、寺主僧教義等奉造者。

〔同〕合墾田地玖佰參拾貳町

……

右依前律師道慈法師寺主僧教義等啓白、平城宮御宇 天皇天平十六年歲次甲申納賜者。

〔日古24〕○長屋王御願書寫大般若經御願文(神龜五年)

檢校藤原寺僧道慈

〔日古9〕○寫疏所解(天平十九年六月七日) 千手千眼經疏二卷(道慈師撰)

〔藤氏家傳下〕僧綱有少僧郁神叡、律師道茲(寧遣下)

〔師資傳〕次遣唐留學僧道慈律師、學緣六宗、三論爲要。本是元興寺、自唐還來、建大安寺、興三論旨。

〔補任1〕(天平元年) 律師道慈(同日任)。三論宗。大安寺。大和國添下郡人、額田氏。大寶元年入唐。養老二年歸

朝

(七四四) 〔天平十六年〕律師道慈(十月辛未日入滅)。七十餘。日本名傳云、冬十月卒

(大寶三年裏書) 道昭・道場・道慈・道境(以上皆義淵一室弟子也)

〔補抄上〕(大寶元年) 道慈入唐。五月有勅召還。

(養老二年) 道慈歸朝畢。圖大唐西明寺、遷造大安寺。

〔七大〕(養老二年) 道慈歸朝畢。圖大唐西明寺、遷造大安寺。留學十六年、專學三論。

(天平元年) 律師道慈へ十月七日任。三論宗。大安寺。額田氏。大和國添下郡人。勤操僧正之師匠也。義淵僧正弟子也。

大寶元年、隨遣唐使粟田道麻呂入唐。經十六年。學三論宗、養老二年歸朝。時當釋門之秀者、唯法師神叡等二人。給食年五十戸。

(天平十六年) 律師道慈へ十月入滅。三論宗。大安寺。七十餘云云。義淵弟子、勤操師也。具如上記之。道慈影像、在興福寺金堂東登廊第二門。尙加法花法中別懸記文。

〔要録1〕(西明寺圖様をとつて大安寺を造れる件)

〔三寶繪下〕(大安寺大般若會。大安寺移轉に關して) 道慈といふ僧あり。心にさとりありて、世に重くし敬はれたりき。さきに法をもとむかために、大寶元年にもろこしに渡りし時も、心の中に大なる寺をつくらむと思て、西明寺の構へ作れるさまをうつしとれりと申。御門悅給て、我願みちぬる也との給。天平年に道慈に律師の位をたまふ。(このあと、大般若會開始の件を述べる)

〔今昔11〕道慈互唐傳三論歸來、神叡在朝試語(略)

〔扶略6〕(養老元年) 同年。道慈律師自唐歸朝。涉覽經典、尤精三論。

(養老三年。續紀と同内容。但し、續紀より簡略)

(天平元年) 同年、天皇欲改造大官大寺。爲遵先帝遺詔也。遍降綸命、搜求良工。爰有稱沙門道慈者、奏天皇曰。

道慈問道求法、自唐國來。但有一宿念、欲造大寺。僉圖取西明寺結構之躰。天皇聞而大悅、以爲我願滿也。勅道慈改造大寺。……卽以道慈補權律師、兼賜食封百五十戶。褒賞有員、不能具記。法師道慈、性受聰悟、爲衆所推。尤妙工巧、構作形製、皆稟其規。所有匠手莫不歎服焉。

(天平八年。續紀に同じ)

(天平九年十月。續紀に同じ)

(天平十六年) 十月、律師道慈卒。

〔具書〕道慈律師、初於本元興寺受智藏僧正。後大寶元年入唐。謁嘉祥孫弟元康法師精三論。養老二年歸朝之後、補造元興寺勾當建新元興寺、又建大安寺。俱弘通三論。

〔八宗綱要〕智藏竝授道慈律師・賴光法師矣。

〔塵露〕藏下有道慈律師・智光・禮光等。道慈入唐、廣學六宗、三論爲本。歸朝之後、建大安寺、大弘論宗。

〔傳通緣起中〕(法相宗) 義淵有七人上足。……道慈律師亦從學法、卽成八人。然道慈律師雖學諸宗、三論爲本。故專爲彼宗祖師。

〔同下〕(眞言宗) 昔人王第四十四代元正天皇御宇養老二年戊午、道慈律師從唐歸朝。在唐一十八年、習學六宗、三論爲本。入唐已前、隨義淵僧正學法相宗。在唐六宗眞言隨一。求聞持法特所精詳。自行化他奮以此法。或云、道慈隨智鳳受求聞持法。而年代可考。……道慈於唐隨善無畏三藏、受學眞言。開元四年善無畏來。同六年戊午道慈還日本。三箇年中於唐傳授。

〔元釋2〕釋道慈。姓額田氏。和州添下郡人也。事吳智藏、稟三論學、大寶元年入唐請益。……養老元年歸、盛唱空

宗。天平九年冬十月啓最勝會於大極殿。……初元年、將新大官寺、下勅寬伽藍營造之宏規。時無委者。慈奏曰。臣在唐時、偷圖西明寺。……十六年十月滅。年七十餘。慈在唐逢密者、得虛空藏求聞法。慈傳善議、議傳勳操、操傳空海云。

〔同21・22〕(略)

〔祖傳集〕(略。續紀天平十六年と養老三三年の記事をつないだもの。但し、天平六年と養老二年になつてゐる)

〔南高〕(略)

〔東高2〕(略)

〔本高4〕(略)

〔永超錄〕浴像經開題一卷〈道慈撰 和書〉

〔謙順錄2〕浴像開題一卷〈道慈述〉

〔私謂〕道慈の事蹟は多岐に亙り、傳記史料も數が多い。それについては從來から研究が少なくないが、朝枝善照〔道慈傳の問題點〕(龍谷史壇五八)に從來の研究が紹介・批評されている。ここでは教理史上の系譜についてだけ簡単に觸れておくと、本書では智藏の弟子とするも、古い史料にはいずれにも見えず、師資傳や珍海の口傳血脈(序論参照)では智藏の系統と別に道慈をたてている。智藏―道慈と結ぶのは、具書や凝念のもの、また元釋などに至つてはじめて出てくる。道慈はまた法相宗の方でも義淵の弟子とされ(補任裏書・七大等)、また、密教の系譜にも出る(本書眞言宗條。また、10・20参照)。

9 道慈於唐齋西明寺圖樣而來。卽奉勅詔、遷古京本大安寺於奈良京、任西明寺圖樣、華構周備。卽於彼寺、弘在唐所學宗。三論爲本、兼弘法相・眞言等宗。

。道慈、西明寺圖樣によりて大安寺建立の件

(史料は前項参照)

10 道慈在唐十八年間、普學大唐所有諸宗。善無畏三藏、開元四年丙辰來唐。道慈在唐具經三年。其間道慈隨善無畏習學眞言。

。善無畏

〔開元釋教錄10〕沙門輸波迦羅、唐言善無畏。中印度人。釋迦之苗裔。……遂發跡中天、來遊東夏、塗至北印度境、聲譽已達帝京。今上搜集賢良、發使迎接。以開元四年丙辰、大齋梵本、來達長安。初於興福寺南院安置、次後有勅、令住西明。至五年丁巳、於菩提院、譯虛空藏求聞持法一卷。沙門悉達譯語、沙門無著綴文筆受。其無畏所將梵本、有勅並令進內。緣此未得廣譯諸經。曩時沙門無行、西遊天竺、學畢言歸。迴至北天、不幸而卒。所將梵本、有勅迎歸。比在西京華嚴寺收掌。無畏與沙門一行、於彼簡得數本梵經、並總持妙門、先未曾譯。至十二年隨駕入洛。於大福先寺安置。遂爲沙門一行譯大毘盧遮那經。其經具足梵本有十萬頌。今所出者、撮其要耳。沙門寶月譯語、沙門〔一〕行筆受。承旨兼刪綴詞理。文質相半、妙諧深趣。又出蘇婆呼、蘇悉地二經。無畏性愛恬簡、靜慮

怡神。時開禪獎勸初學、慈悲作念、接誘無虧。人或問疑、剖析無滯（正藏55）

（私謂）善無畏の傳は多いが、生前に書かれた『開元釋教錄』を擧げておく。没年は開元二十三年（七三五）、九十歳。その他の主要な傳記として、『續古今譯經圖紀』『玄宗朝翻經三藏善無畏贈鴻臚卿行狀』『大唐東都大聖善寺故中天竺國善無畏三藏和尚碑銘并序』『宋高僧傳』2などがある。

11 大安寺有慶俊律師・善議大德。隨從道慈、俱學眞言。慶俊大德、專以眞言爲其本宗。乃愛宕山本願也。

。慶俊

〔續紀19〕（天平勝寶八年五月）丁丑。勅、奉爲先帝陛下屈請看病禪師一百廿六人者、宜免當戶課役。……又和上鹽

眞・小僧都良辨・華嚴講師慈訓・大唐僧法進・法華寺鎮慶俊、或學業優秀、或戒律清淨、堪聖代之鎮護、爲玄徒之領袖。……法進・慶俊並任律師。

〔同30〕（寶龜元年八月乙卯）以慈訓法師・慶俊法師復爲少僧都。

〔日古7〕○大安寺（？）請經牒狀

大寺牒

涅槃經疏第五卷六卷

右疏、要可見、宜隨了而早付使可送、以狀、

（七三三）
天平三年九月二日仕丁鴨部麻佐

〔知僧慶峻〕^(自署)

〔辛國東人〕^(自署)

〔同9〕○間寫經本納返帳

敬進

法華經古藏師疏十卷開初五卷以爲十卷

(中略)

天平感寶元年六月十二日^(七四九)

慶俊謹狀

奉送

法華疏末十二卷

六月十七日慶俊

〔同3〕○大安寺三綱牒

大安寺三綱牒上 奉請仁王經并囊等事

合十八部卅六卷 經囊十四口之中〈十一口大安寺講師三口他寺講師〉

……慶俊師……

右、件講師等經囊、隨所在返上如前、以牒上、

天平勝寶五年四月七日小寺主僧法融^(七五三)

〔同12〕○應請疏本目錄(天平勝寶三年六月二十六日)^(七五一)

勝鬘經疏一部三卷元曉師

右疏、在慶俊師所

○應請疏本勘定目錄(同日類收)

十地論疏一部七卷選法師述 在大安寺慶俊師所

法花經疏一部七卷道榮師述 在右大安寺慶俊師所

勝鬘經疏一部二卷元曉師述 在慶俊師所 又處々甚多也

○應請疏本目錄(同)

慶俊師之所

十地論疏一部七卷選法師 勝鬘經一部二卷元曉師

[同4] ○經疏出納帳

法華寺牒 造東大寺司務所

奉請大般若經壹部事

(中略)

天平勝寶五年八月五日都維那丘光返(七五三)

大鎮法師慶俊

上坐丘願稱

○阿波國名方郡新島庄券(東南院文書2にも收録。同五二九)

(七五六)
天平勝寶八年十一月五日

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

律師法師慶俊

〔平遣1〕〇七四 因幡國司解（八四二）（承和九年七月廿四日。東南院文書2にも收録。同五四〇）

……被太政官去天平勝寶八年十月一日符、使律師慶俊……

〔要文抄3〕同（延曆僧錄）第五云。釋慶俊者、河内人也。俗姓藤井。名大安寺。弱齡之歲、情樂道門、辨李之年、

預參玄。服宗匠唐學生道慈律師、入室昇堂、諮稟道化。三藏範圍、六足玄關。空有窮凝（微力）、圓宗洞曉。承基有緒、

名播朝端。〇講華嚴經論義去、決疑釋滯。驚波千里、長鯨吞而絕流、雲湧萬里、大風掃而皆盡。僧都、履信居懷、

輕財重義。檀那爲始、般若居終。二施存請、來求見給。……〇僧都平生作知足天業。至六年歲次九月三日大期告

謝。春秋若干〔文〕。

〔御遺告（空海）〕一以珍皇寺〔字右當寺〕（愛信）可修治後生弟子門徒之中緣起第四

右寺建立大師是吾祖師故慶俊僧都也。

〔師資傳〕慶俊大僧都・善議法師、受（道慈）律師。

〔要錄1〕（七五二）（天平勝寶四年）八月二日請律師隆尊、令講花嚴經於上宮三箇日、問答析微。以輪達・弘明・玄智・正基・

永鑑・嚴智・慶俊等爲聽衆也。

〔補任1〕（天平勝寶八年）律師慶俊〔同日（五月廿四日）任。真言宗。大安寺。愛宕山根本師〕

（天平神護二年）（七六六）律師慶俊〔去職歟。可尋〕

（寶龜元年）律師慶俊〔同日（八月廿六日）任小僧都〕

（同九年）（七七八）小僧都慶俊〔月日、入滅〕

〔七大〕(天平勝寶八年律師。以下、神護慶雲三年まで續き、翌寶龜元年少僧都。以下、同九年まで。但し、途中、次の記事あり)

(寶龜三年)^(七二) 小僧都慶俊(或本云。十二月廿四日辭退云云。大安寺)

〔扶略2〕(天平勝寶八年。續紀に同じ)

(寶龜元年八月廿六日) 律師慶俊、補少僧都。慶俊、河内人也。俗姓藤井。大安寺道慈律師入室弟子。住法花寺。空有窮微、圓宗洞曉。悲心愍物、常施貧病。衣藥所須、无却來實。引勵有緣、造元興寺食堂。常作知足天業(已上) 兩僧德行、出延曆僧錄

〔具書〕大安寺善議・慶俊是(道慈)上足弟子。

〔元釋14〕釋慶俊、姓藤井氏。内州人。事道慈、學空宗。居大安・法華等寺。嘗開愛宕山、爲第一世。天應元年、爲僧都。性懷悲愍、好施貧病。

〔本高4〕(略)

〔永超錄〕因明入正理論文軌疏記三卷(慶俊)

一 乘佛性究竟論記六卷(大安寺聖俊僧都)

〔安遠錄〕一 乘佛性究竟論記六卷(大安寺慶俊述)

〔一乘要決中〕究竟論補闕(慶俊)。三論宗(作比量相違云。定性二乘、亦應唯一佛乘等言之所遮(宗)。三乘所攝、非

佛乘(因)。如不定乘(喻)。又作法差別相違云。二乘之果、應無定二乘性。乘所被故。如大乘者(已上)

〔同〕究竟論補闕(慶俊記)、於樞要量、出所別不成・能別不定・有法自相・有法差別相違等過(云云)

〔私謂〕以上の他、日古3・經疏出納帳（天平二十年）に

勝覺經疏三卷へ……花嚴講師敬俊師書者

右、以十九年十一月廿八日奉請、以廿年二月廿四日返奉如前

この「敬俊」も慶俊のことと考えられる（佐久間龍「慶俊」、『日本古代僧傳の研究』一〇五頁）。

傳通縁起本文では、「專以眞言爲其本宗」と言われているが、永超録・安遠録、また一乘要決の引用からもわかるように、三論關係の著述も残しており、また、要文抄所引延曆僧略等から、華嚴をよくしたことも知られる。奈良時代後期のこの頃になつてはじめて三論對法相の論争が生じ、慶俊はその最初の頃の三論の論客であつたと思われる。それに對し、法相側では、慈訓やその弟子で『掌珍量導』の撰者とされる仁秀がいる（富貴原章信『日本唯識思想史』二七六―七頁。平井俊榮「平安初期における三論法相角逐をめぐる諸問題」、駒大佛教學部紀要37）。

。善議

〔日本後紀22〕（弘仁^(八一)三年八月）戊申、傳燈大法師善議卒。本姓惠賀連。河内國錦部郡人也。法師入唐學問道慈大德

之入室也。少捐塵事、早結道遊。天資秀異、氣稟冲和。能持梵甲、志願傳燈。是以三論之家、許號法將。中道之理、流布國家、則伊人之力也。才位不愜、桃李成蹊。千歲之名、是謂不朽。道極如體、忽歸大暮。人之云亡、衆生不幸矣。時年八十四。

〔塵露〕善議・勤操・安澄等諸德、皆大安寺卽道慈門葉也。

〔元釋2〕釋善議、姓慧賀氏。内州錦織郡人。奉道慈受三論之學。又蹈滄浪入唐請益。當時學徒、推博於議。歲八十
四滅。弘仁三年也。

〔祖傳集・祖師傳〕（日本後紀にもとづく）

〔東高2〕（略。元釋にほぼ同じ）

〔本高5〕（略）

12 三論一宗、從唐土傳、有三代傳。一云慧灌僧正傳。二云智藏僧正傳。三云道慈律師傳。

。三論三傳

〔塵露〕是故三論即有三傳。

〔私謂〕比較的古い史料で三論の三傳を伝えるものは、上記の凝念のもの他、祖傳集に惠灌・智藏・道慈を第一・
第二・第三としている（序論参照）。

13 孝德天皇御宇大化二年丙午、^{（六四六）}慧師・慧輪・智藏三般、同時任僧正。是三論講竟日之勸賞也。

。慧師・慧輪・智藏僧正任命

〔私謂〕補任等では、天武天皇二年に慧師・慧輪・智藏等の僧正任命を言うが（前出・5）、大化二年の僧正任命に

關しては未檢。

14 智藏上足有三般匠。乃道慈・智光・禮光也。智光・禮光、奈良新元興寺住侶。立仙光院、弘通法宗。莊嚴極樂房、圖安養依正、安置彼房。是智光法師所建立也。

。道慈（前出・8）

。智光・禮光

〔日古13〕○紫微中臺請經文

奉請陀羅尼集經十二卷

如意輪陀羅尼經一卷

右、奉請八田智光師所如件

天平勝寶七歲八月廿一日付舍人江野鞆鞆（七五五）

〔判少忠山口忌寸沙彌萬呂〕

〔靈異記中〕智者誹妬變化聖人而現至閻羅闕受地獄苦緣第七

釋智光者、河內國人。其安宿郡鋤田寺之沙門也。俗姓鋤田連、後改姓上村主也（母氏飛鳥部造也）。（七四四）天年聰明、智惠第一。製孟蘭盆・大般若・心般若等經疏、爲諸學生、讀傳佛教。時有沙彌行基。……以天平十六年甲申冬十一月、任大僧正。於時智光法師、發嫉妬之心而非之曰。我是智人、行基是沙彌。何故天皇、不齒吾智、唯譽沙彌

而用焉。恨時、罷鋤田寺而住。儻得痢病、經一月許。臨命終時、誠弟子曰。我死莫燒。(以下、地獄に墮ちて蘇り、行基に歸依した話が續く) 智光大德、弘法傳教、化迷趣正。以白壁(光七)天皇世、智囊(光七)脫日本地、奇神遷不知堺矣。(同じ話は、行基年譜・三寶繪中・法華驗記上・往生極樂記・今昔11・私聚百因緣集7・扶略抄2などに出る)

〔往生極樂記〕元興寺智光・賴光兩僧、從少年時同室修行。賴光及暮年、與人不語。似有所失。智光怪而問之、都無所問。數年之後、賴光入滅。智光自歎曰。賴光者是多年親友也。頃年無言語無行法、徒以逝去。受生之處、善惡難知。二三月間、至心祈念。智光夢到賴光所。見之似淨土。問曰。是何處乎。答曰。是極樂也。……智光言。此土莊嚴、微妙廣博、心眼不及。凡夫短慮、何得觀之。佛即舉右手、而掌中現小淨土。智光夢覺、忽命畫工、令圖夢所見之淨土相、一生觀之、終得往生矣。(同じ話は、今昔15・扶略4〔白雉二年〕・十訓抄5・私聚百因緣集7などに出る)

〔師資傳〕次入唐學生吳智藏僧正。……仙光院智光法師・禮光法師、相受傳之。

〔具書〕本元興寺仙光院智光受智藏、同賴光受智藏并智光。

〔塵露章〕藏下有道慈律師・智光・禮光等。……智光・禮光、住元興寺、弘通三論。

〔元釋2〕釋智光、內州人。共禮光止元興寺。得智藏三論之深旨。藏之室中、推二人爲神足。有靈叡者、受于二光。今之三論家、皆叡之胤也。(以下、往生極樂記と同じ話) 智覺命工、圖佛掌淨土、常自觀之。其後吉祥而逝。其

圖見在元興寺。世爭摸寫。

〔本高4〕和州元興寺沙門智光傳 禮光

……光精於空宗、著華玄略述等書。嘗曰。三論有二。一者部別三論。中・百・十二、是也。二者義別三論。破邪

顯正言教、是也。其義別者、一切邪法也故破之。一切正法也故顯之。邪正平等、法界宛然、是名言教。又依曇鸞義、著天親菩薩往生論疏釋五卷。

〔永超錄〕大慧度經疏廿卷〈智光撰。云三〇東大寺長承五年(師)。下帙和國論〉^(論力)

法華玄述記五卷〈智光。私按。玄論略述、元興寺智光作。後住仙光院。云仙光述。法華玄論末註也〉

淨名玄論〈日本智光述。曰名玄略述者是也〉

孟蘭盆經疏述義一卷〈智光〉

無量壽經論釋五卷〈日本智光述〉

正觀論一卷〈智光撰〉

〔長西錄〕安養賦一卷 智光〈日本元興寺〉

〔謙順錄〕中論疏記六卷〈智光述。出古錄〉

初學三論標宗義一卷〈智光述。出古錄〉

〔般若心經述義序〕智光從生九歲、避憤肉處、遊止伽藍。然自志學、至于天平勝釋四年、合三十箇年。專憩松林、練(七五二)

身研神、隨堪禮讚、周覽聖教。

〔私謂〕智光是最初の本格的な三論の學者・著述家で、多くの著述を残したが、現存するのは『般若心經述義』と

『淨名玄論略述』の二つで、後者は完全ではない。これらの著述についての研究として、伊藤隆壽「智光の撰述について」(騎澤大學佛教學部論集七)がある。筆者もかつて「元興寺智光の生涯と著述」(佛教學一四)を書いたが、伊藤氏の論文を見ていなかった爲、不備なものとなり、氏にもご迷惑をお掛けした。ここで改めてお詫び

したい。

智光は『無量壽經論釋』を著わし、『往生傳』にも記されている爲、この方面からの研究が進んでいる。これらの研究論文の目録は元興寺佛教民俗資料刊行會編『智光曼荼羅』に掲げられている。

智光が智藏の弟子であることは、師資傳以來の定説であるが、兩者の年齢が離れていることから、疑問が呈されている（寺崎修一「元興寺智光の事ども」、現代佛教六二）。

禮光（頼光）については、常に智光と一緒に語られ、獨立した事蹟は知られていない。なお、多くの史料が智光の同門とする中で、具書が智光からも教えを承けているとするのが特異である。

。仙光院・極樂房

〔諸寺縁起集〕極樂坊

安極樂萬陀羅、故號極樂坊也。智光法師所書之萬陀羅也、則號智光萬陀羅也。長廣二尺許也。去寶德三年十月十四日、於禪定院而燒失了。（佛全・續々群）

〔極樂坊記〕極樂坊者、元興良角、乃爲附庸。嘗名仙光院。上宮太子之權輿也。元正御宇、移院於奈良。爾來智光・禮光之二沙門、養老・神龜之比、修練之場也。（元興寺編年史料上）

〔七大寺日記〕極樂房者、智光・頼光兩聖人の共に往生せる房也。……其房に智光が爲に所現淨土の相を圖寫せる極樂曼荼羅、尤可拜見、

〔今昔15〕……其後其ノ房ヲバ極樂房ト名付ケテ……

『三國佛法傳通縁起』日本三論宗章研究

〔私謂〕極樂房に關しては、さらに『元興寺編年史料』に他の史料も掲げられている。仙光院と極樂房の關係については、伊藤隆壽、前掲論文參照。

15 如來滅後經一千五百七十四年、乙酉之歲、慧觀來朝。來朝之後二十一年、未廣講敷。大化二年丙午、初開三論講場。此即佛法傳日本後、經九十五年、始講三論。

。慧觀（既出・1）

16 其第二傳、智藏僧正、未詳時代。應勸僧史。

。智藏（既出・7）

17 第三傳者、道慈律師、(七〇)大寶元年辛丑、初傳之後、經十七年。當大唐第六玄宗帝開元六年戊午。(七二八)善無畏三藏來唐之後、經三年焉。道慈(七四四)天平十六年甲申十月入滅。年七十餘。

。道慈（既出・8）

〔私謂〕「初傳之後、經十七年」がよくわからない。大寶元年入唐から開元六年（養老二年）歸國まで十七年を経ているが、そのことであろうか。しかし、それでは「初傳之後」がはつきりしない。國譯では「初めて之を傳へん

とし、後、十七年を経て」と讀んでいるが、あるいは適當か。古活字本では「七十七年」となつてゐるが、疑問。

18 善無畏三藏、於唐翻譯大日經後、來日本國、初著東大寺西南之阿（古老傳云、結庵八十日住）。後廬來目寺東南之岫、經二箇年、七百二十日住。其間建立多寶大塔八丈、移南天鐵塔之半分。以佛舍利三粒、納寶塔之底。以大日經七軸、安利柱之下。然後三藏還大唐國。開元二十三年乙亥入滅。（七三五）春秋九十九。當日本國天平七年乙亥。

。善無畏來日

〔扶略6〕（七一七）（養老元年）或記云、大唐善無畏三藏、養老元年入朝。私云。無畏三藏來本朝事、不見處々之文。因茲世

人多不知也。但勘下文、延曆廿四年八月廿七日內侍宣稱。昔天竺上人、自雖降臨、不勤訪受。徒遷谿舟、遂令眞言妙法絕而无傳。若是指於無畏三藏來朝之時歟。彼人既是西天之國王、眞言之祖師也。頗似相諧。……

〔傳通緣起下〕然一行禪師開元十五年奄卒。無畏其後應來日域。久目東邊立一基塔、三年之後、還于大唐。三藏於大唐國奄焉物故。年九十九。三藏裹玉而來。根機未熟、納經安塔。

〔元釋1〕釋善無畏者、甘露飯王之裔也。唐開元四年丙辰、至長安。玄宗預夢眞儀。泊入對、與夢無異。大悅館西明寺、崇爲教主。二十有三年示滅。塔龍門之西山。吾元正帝養老之間、來此土。時機未稔、利導無聞。只延曆二十四年內侍宣曰。昔天竺上人、雖垂降臨、不勤請受。徒遷壑舟、遂令眞言祕法而絕而无傳云々。言無畏也。畏之事迹、備見宋高僧傳。

〔和州久米寺流記〕一東塔院大塔大日經安置事

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

此塔者多寶大塔、高八丈也。遷南天鐵塔之半分、以善無畏三藏其立之。伴三藏、齋持大日經、獨入焉野馬臺之國、初著于東西南之阿。(大寺院之)三藏普廻四瀛八紘、求七軸安置之場。大日本國高市郡王舍側、此地最足稱美、仍廬東院之岫。而三箇年七百二十日際、起立一寶龕、而號之東塔院。卽以三粒之佛舍利、納寶石之底。又以七軸之大日經安利柱之下。

〔本高一〕(略)

〔私謂〕善無畏來日の話は、空海が入唐前に久米寺で大日經を感得したという話と關連して形成されたものと思われる。空海の大日經感得については、御遺告などに見え、傳通縁起下にも出る。關連する史料については、『弘法大師傳記集覽』延曆十七年條參照。

19 善無畏三藏、來至日本年代未詳。然開元十二年(七二四)已後、翻譯大日・蘇悉地・蘇婆呼經。三藏爲一行禪師講大日經。隨講記錄、成二十卷。此卽一行具以三藏講授口傳、如言記之。全是三藏自親解釋、非一行自作、只是具結集。最初草本、弘法大師傳之弘通。唐朝後人取捨文句、或爲十卷・十四卷等。開元十五年丁卯十月一行入滅。(七二七)春秋四十二。當日本國聖武天皇御宇神龜四年丁卯。其後善無畏應是來日本國。卽神龜五年戊辰。(七二八)次天平元年己巳、二年庚午、應此時代。(七三〇)未立東大寺前、當此寺西南之阿、結庵居住。于後弘法大師於此處所建立眞言院、摠言南院者是也。其後三藏歸大唐者、應是天平三年已後焉。(七三二)

。一行

〔私謂〕一行の傳は舊唐書方伎傳・宋高僧傳五・略付法傳（空海）・內證佛法相承血脈譜（最澄）などに見える。生没年に關し、本書では開元十五年四十二歳で没となつてゐるが、舊唐書などによると、四十五歳となつており、ずれがある。

。最初草本、弘法大師傳之弘通

〔御將來目錄（空海）〕大毘盧遮那經疏一部二十卷〔一行禪師撰〕

。或爲十卷・十四卷等

〔入唐新求聖教目錄（圓仁）〕大毘盧遮那經疏十四卷〔一行阿闍梨述〕

〔私謂〕通常『大日經義釋』と言われるもの。なお、十卷本については未詳。

。眞言院（南院）

〔類聚三代格²〕

太政官符

應東大寺眞言院置廿一僧令修行事

右檢案内、太政官去弘仁^{（八三）}十三年二月十一日下部省符傳。右大臣奉 勅、去年冬雷、恐有疫水。宜令空海法師、於東大寺爲國家建立灌頂道場。夏中及三長齋月、修息災增益之法、以鎮國家者。……

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

(八三八)
承和三年五月五日

〔具書〕(空海) 以弘仁元年補當時之執務、依聖主勅命住僧坊之西室、經一任之程、送四載之間、推尋善無畏之舊跡者、自在寶生尊之當□則收金剛寶之祕牘、建立眞言院之淨場、建立南院者則是也。

〔私謂〕眞言院度立に關する基礎史料は上掲の太政官符で、その他の史料については、『弘法大師傳記集覽』弘仁十三年條を參照。具書は善無畏舊跡との關係を述べている點で注目される。

。善無畏來朝の年

〔傳通緣起下〕善無畏三藏來朝之年、雖無記錄、應是聖武天皇御宇神龜季曆天平初運。

〔元釋1〕元正帝養老之間、來此土(既出・18)。

〔塵添壺囊鈔20〕久米ノ道場大日經ノ事

是ハ人皇四七四代元正天皇ノ御宇養老二年(戊午)天竺ノ善無畏三藏來朝シ給テ……養老二年ニ無畏來朝事ハ釋書ニ載セタリ。(七一〇)

〔私謂〕敢えて異說を檢討しても仕方のない問題ではあるが、概念が他と不鈎合なまでのスペースをさいてこの問題の考證に費している點が興味深い。

20 三藏西來、先譯求聞持法。道慈傳求聞持法者、即隨此傳受。道慈律師、於日本國、應謁善無畏。其時道慈造大安寺。土木終功、昌弘宗教。

。道慈、善無畏より受學の件

〔私謂〕確かに道慈の唐滯在中に善無畏が來たのであるから、何らかの接觸はありえたとしても、直接學んだとは思われない。道慈と求聞持法を結びつけようとするのは、言うまでもなく、道慈―善議―勤操―空海という系譜を立てようとしているのである。

21 道慈授三論法義於善議。善議授法於安澄・勤操。

。善議（既出・11）

。安澄

〔紀略前14〕（弘仁五年）^{（八一四）}三月戊申朔、大安寺僧安澄卒。法師爲人敏給、問答絕倫。西大寺律師泰演、特爲仇敵。奉

對龍顏、共爭折角。彌勒出世、勝負定矣。卒時年五十二。

〔師資傳〕勤操律師・安澄法師、受議德傳。西大寺實敏大僧都者、澄之入室也。

〔具書〕善議弟子、同寺（大安寺）安往并勤操也。^{（澄之）}

〔八宗綱要〕善議授勤操僧正、勤操授安澄大德。

〔元釋2〕釋安澄。姓身人氏。波州缸井郡人。善議之上足也。大啓空宗、兼學密教。與勤操結誓、以弘法爲己任。爲人敏給、議論絕倫。唯西大寺泰演、時爲匹敵。弘仁五年三月卒。年五十二。

〔祖傳集下〕大安寺善議之資

釋安澄。俗姓身人部。丹波國船井郡人也。同寺善議之入室也。法師大啓空宗、能傳(密カ)蜜法論。其研精殆踰于蘊。與贈僧正勤操、結交深矣。誓弘演一來津梁六趣。起延曆八年、世々相傳、期之無窮。西大寺律師泰演、時爲仇敵。奉對龍顏、共爭折角。彌勒出世勝負定矣。朝議許以綱羅之、事未及印可。弘仁五年申午三月戊甲朔卒。春秋五十。(甲カ)
一。

〔祖師傳〕(略)

〔本高5〕(略)

〔中論疏記跋文〕……是以集衆師異說、勒成八卷……(八〇一)起延曆二十季迄于大同元年了(八〇六)

〔私謂〕安澄は傳は必ずしも明らかでないが、大著『中論疏記』八卷が現存しており、奈良朝教學を集大成した平安初期の三論教學を知る最大の手掛りである。安澄に關して注目されるのは以下のような點である。(1)法相宗の西大寺泰演と論争し、當時の三論對法相論争の一環となつた。(2)大安寺には別三論衆が置かれ、道慈によつてもたらされた新しい要素がはいつてゐるのではないかと言われる。この點に關し、種々の議論があるが(井上光貞氏・田村圓澄氏など)、なお『中論疏記』の充分な検討と、元興寺系の智光の説との比較などが必要である。(3)『中論疏記』には極めて多くの引用がなされ、中には現存しないものも少なくない。この點からも本書は極めて價值あるものと考えられる。この第三點を中心に、本書を論じたものとして、伊藤隆壽「安澄の引用せる諸注釋書の研究」(駒澤大學佛教學部論集8)がある。

なお、『八宗綱要』のみ善議—勤操—安澄という系譜を擧げるが、勤操と安澄とはほとんど年齢差もないので、

疑問である。

。勤操

〔性靈集10〕故贈僧正勤操大德影并序

……爰有一傳薪者。法諱勤操、俗姓秦氏。母則島史。大和州高市人也。初母氏無嗣、中心憂之。數詣駕龍寺玉像前、香華表誠、精勤祈息。夜夢明星入懷、遂乃有娠。法師生而未幾耶、早棄背。孤露無歸、母氏鞠養。年甫十二、就大安寺信靈大德、以爲吾師。景雲四年秋、有勅、於宮中及山階寺度一千僧。法師則千勤之一也。十六渴慕閑寂、厭惡囂塵。遂懷忘歸之思、躋南嶽之窟。比及弱冠、親教數召、令受具足。入壇之後、就同時三論名匠善議大德、稟學三論之幽顯、勤經十餘年。彼大德則故入唐學法沙門道慈律師之入室也。公鼓篋於昆訶之中、攝念於巖藪之裏。不擲寸陰、二利是競。鶴響易聞、高天聽卑。弘仁四年、拔以律師。皇帝屈法師於大極殿、令講最勝。講了之日、更於紫宸殿、集諸宗大德、令舉旗鼓、以公爲座主、卽立義。三論是祖君之宗、法相則臣子之教。何者、阿僧釋龍猛之中觀、護法註提婆之百論、竝稱歸命阿闍梨故。時敵宗名將、刀劍旗靡。皇帝歎之、卽任少僧都、兼造東寺別當。今上膺堯之揖讓、扇舜之南風。以公智而辨、恭而謙、導人不倦、濟物方便、擢之大僧都、轉造西寺。公位彌高、志逾下。如晏嬰之守雌、似羅云之忍辱。四量爲衣、一如爲座。乘無住之騎、唱此不二、慨有爲之人、談彼三空。所有善業、悉皆鑽仰。或勸造煖子、諸寺普施。或設老僧衣、一心敬供。或調倭曲、以沐浴義成。或奏漢樂、而詞享能仁。禮三千佛名二十一年、講八座法華三百餘會。……以天長四年五月七日、於中京西寺北院、奄然化矣。春秋七十、夏臘四十七。以十日茶毗東山島部南麓。是日有勅、贈僧正。……貧道與公蘭膠、春秋已久。弘仁七年

孟秋、率諸名僧、於高雄金剛道場、授三昧耶戒、沐兩部灌頂。……(天長五年四月十三日)

〔續後紀2〕(天長十年十月) 壬寅、延曆寺座主僧傳燈大師位圓澄卒。時年六十二。……(延曆廿四年) 秋八月宣勅

令取澄師修入唐所受灌頂祕法。是大法師・修圓・勤操等七人、爲受法弟子。

〔後紀22〕(弘仁四年正月) 戊辰、最勝王經講畢。延高學僧十一人於殿上論議、施御施。傳燈大師位勤操爲律師。

〔類國178〕淳和天皇弘仁十四年十二月癸卯、請大僧都長惠・少僧都勤操・大法師空海等於清涼殿、行大通方廣之法、

終夜而畢也。

〔紀略前篇14〕(天長四年五月) 戊辰、大僧都勤操卒。春秋七十四。庚午、有勅、贈僧正。

〔類國187〕(天長) 四年五月戊辰、贈僧正傳燈大師位勤操卒云々。景雲四年秋、有勅、於宮中及山階寺度一千僧。

法師則千勤之一也。

〔平遺1〕○四六 大和國川原寺牒(弘仁十一年十月十七日)

別當小僧都傳燈大師「勤操」

〔御遺告(傳空海)〕及于生年十五入京、初逢石淵贈僧正大師、受大虛空藏等并能滿虛空藏法呂。……(四國での修行

の後) 爰大師石淵贈僧正召率發向和泉國槇尾山寺。於此剃髮授沙彌十戒七十二威儀、名稱教海、後改稱如空。

〔三寶繪下〕七月 文珠會

文珠會は、はじめは僧の心ざしよりおこりて、今はおほやけことゝなれり。贈僧正勤操・元興寺の僧泰善が、幾内の郡り里とにして、ひろく此會をまうけて、飯をつゝみなをくはへて、もろもろのまつしき物にほどこしゝなり。

〔同中〕(大安寺にありし時、榮光に代りてその母を養い、延曆十五年、母の死後は石淵寺にて法華八講を行い、菩提を弔り。發心集5他にも出る)

〔補任1〕(弘仁四年) 律師勤操 〔正月十四日任。三論宗。大安寺。道慈律師入室。大和國高市郡人。秦氏〕

(八一九) 〔同十年〕 律師勤操 〔正月十四日癸巳、任小僧都〕

(八二六) 〔天長三年〕 小僧都勤操 〔月日任大僧都〕

(八二七) 〔同四年〕 大僧都勤操 〔五月七日入滅。於中京西寺北院奄然而化。生年七十四、薨卅七。贈僧正〕

〔補抄上〕(大同四年) 或記云。大同三年、勤操任律師。

(弘仁十年) 勤操 〔正月十日日任少僧都。勅囑法師。於大極殿集諸宗名名德論宗。敵宗期靡。仍授以少僧都〕

(天長四年) 大僧正勤操 〔五月七日入滅。年七十四。道慈弟子也〕

弘仁四年任律師。同十年少僧都。天長三年大僧都。同四年於中京西寺北院奄然而化。茶毘之日、贈僧正、號石淵僧正。

〔傳通緣起下〕 道慈以眞言法授善議・慶俊、議公授之于勤操僧正、勤操授求聞持法于弘法大師。

〔元釋2〕 (前半、性靈集にもとつき、後半、三寶繪に出る法華八講の緣起譚)

〔祖傳集〕 (ほぼ性靈集にもとづくも、「春秋七十四、夏臘四十七八」とする)

〔延曆寺護國緣起〕 勤操僧正頂傳教大〔師〕傳法事

勤操僧正被送傳教大師邊消息一通 (本文略)

(八〇八) 大同三年三月十二日 下僧勤操狀上

『三國佛法傳通緣起』 日本三論宗章研究

叡山法前

叡山仁忠大德記。弘仁四年先師依宣始金光明會番論義。勤操大法師（八三）〈空海師範〉先師受法灌頂弟子也。仍先師爲

威儀僧同參、勤金光明命云々。（會カ）

弘法大師以勤操僧正爲師範事（略）

〔叡岳要記〕延曆寺供養（九九四）へ今云中堂。延曆十三年甲戌九月三日

堂達勤操大法師へ元興。三論

〔本高5〕（略）

〔私謂〕勤操は三論教學上の事蹟よりも空海との關係をもつて名高い。性靈集で見ると、空海が勤操に師事したとは言われていないが、後、御遺告に見るように、求聞持法の傳授、及び出家の際の師と見られるようになった。

空海との關係については、『弘法大師傳記集覽』延曆十年・十七年・弘仁七年の條參照。他方、續後紀や延曆寺護國緣起・叡岳要記などから、最澄との關係も知られる。三論の相承については、既に性靈集の文に善議に學んだ旨記されており、問題はない。なお、勤操については、池田源太「石淵寺勤操と平安佛教」、『奈良・平安時代の文化と宗教』所收）參照。

22 西大寺實敏大僧都、受法於安澄大德、即弘之彼寺。西大寺三論宗者、實敏所弘也。

。實敏

〔續後紀13〕(八四三) (承和十年十一月九日) 大法師實敏、爲律師。

〔同20〕(八五〇) (嘉祥三年二月辛未) 以三論宗少僧都實敏、法相宗大法師明詮、天台宗大法師光定、摠持門大法師圓鏡等、

爲座主、於清涼殿限三ケ日、講法華經。諸宗大德翹楚者三四人、預序。發揚大義、各持矛盾。天皇隔御簾而聽之。

〔文德實錄5〕(八五三) (仁壽三年十月) 壬午(二十五日)。任僧綱。策命曰。……少僧都實敏乎大僧都尔。

〔同8〕(八五六) (齊衡三年) 九月癸卯(三日)。大僧都傳燈大法師供實敏卒。實敏、俗姓物部氏。尾張國愛智郡人也。初實敏在孕時、

母夢見室中度三重塔。及生、眼有重瞳、耳孔相通。年十三、從伯父大法師中安入都。實敏聰朗日倍、受持經論。

中安歎異之、乃屬律師玄觀。々々察其法器、摩頂誨誘。更從入唐大僧永忠、學經論所滯。二年受具足戒。(八一九) 弘仁十

年、興福寺維摩會、預序論難。時諸寺學業之輩、聽其豎義、莫不驚聳。(八四二) 承和九年、於大極殿講最勝王經。皇帝臨

聽。實敏問答驚策、脣舌紛紜。分決疑滯、毫毛必剖。帝稱歎久之、明年擢拜律師、再轉爲大僧都。卒時年六十九、

夏聽五十。實敏言詞可羨、音聲和美。發願教誨、聞者流淚。

〔平遺1〕〇八〇 僧綱牒(八四六) (承和十三年九月廿五日)

律師「實敏」

〇一六八 廣隆寺資財帳(八七三) (貞觀十五年)

獸麾壹枚

按机壹脚

已上二種大僧都實敏大法師施入

〇一七五 廣隆寺資財交替實錄帳(同右)

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

〔同8〕〇四四五(八四五) 僧綱牒(承和十二年五月廿日)

律師「實敏」

〔同9〕〇四四五八 僧靈鎮位記(八五〇)(嘉祥三年正月九日)

小僧都傳燈大法師「實敏」

〇四四六八 僧綱牒(八五六)(齊衡三年正月廿七日)

大僧都「實敏」

〔要文抄3〕音石山(明證)大僧都傳云。……(八四九)嘉祥二年二月、皇帝於清涼殿設四高座、令說四卷金光明經、以四宗法師爲

講師。以和上爲法相宗師、以實敏大僧都爲三論宗師、以正義(八四九)大法師爲華嚴宗師、以圓修(八四九)大法師爲天台宗師。

〔師資傳〕西大寺實敏大僧都者、澄之入室也。

〔要錄5〕別當章第七

第廿一大法師圓明承和五年任

寺務五年同五六七八九

丹勘之或日記實敏大德承和五年任云々

裏書云

承和五年六月八日(八四一)起二日五十箇日間、修理毗沙門天寺工從八位上神氏勝助等率廿餘人修理。于時別當大法師圓

明。如此記者、實敏非別當歟。

〔補任1〕(八四一)(承和八年)講師實敏(三論宗。西大寺。尾張國愛智郡人。物部氏。[困生年五十四])

〔八四三〕 律師實敏、十一月九日任。三論宗。西大寺。已講勞。〔五十六〕 尾張國人。物部氏。

〔八四八〕 律師實敏、九月廿日、轉任小僧都。

〔八五三〕 仁壽三年、小僧都實敏、同日任大僧都。〔六十六〕

〔八五六〕 齊衡三年、大僧都實敏、九月三日入滅。〔六十九〕

〔補抄上〕 〔承和五年〕 十二月十九日、元興寺律師靜安、於清涼殿始修佛名懺悔。限三日修之。靜安・願安・實

敏・願定・道昌等、互爲導師。

〔具書〕 安澄弟子實敏・玄叡、於西大寺弘之。

〔元釋3〕 〔文德實錄の卒傳による〕

〔三定〕 〔承和八年〕 講師實敏、西大寺。三論宗。同十年十一月九日任律師。超恩・泰緣二人。嘉祥元年九月廿日、

任少僧都。仁壽三年任大僧都。齊衡三年九月卒。六十八歲。

〔本高5〕 〔略〕

〔三論玄疏文義要（珍海）3〕 〔裏書〕 二諦私記一卷。名義集不知作者。又別有實敏僧都私記一卷之。〔正藏〕

〔私謂〕 文德實錄では實敏は玄叡・永仲の弟子とし、安澄のことは記さない。ここから平井俊榮氏は安澄―玄叡―實敏という系譜をたてるが、『大乘三論大義鈔』の著者玄叡について、駒澤大學佛教學部紀要36、ほとんど時代

を隔てない師資傳に「澄之入室」としているから、安澄の弟子と認めても差支えないのではないかと思われる。

なお、實敏の著書『二諦義私記』は大須文庫に現存することが伊藤隆壽氏により確認されている（實敏僧都の

『二諦義私記』について、印佛研26・1）。

23 自爾已後、彼寺學三論宗名哲繼踵、橫豎弘通。弘仁聖代、玄叡律師、製三論大義鈔四卷、奉勅詔造之。

。玄叡

〔師資傳〕神泰法師相次傳之。宣融法師・玄耀法師・西大寺玄叡法師・元興寺道唱律師、皆其裔也（私云。西大寺玄叡律師・元興寺道昌律師、皆受習神泰師爲其弟子）

〔要錄5〕神泰法師相次傳之。宣融法師・玄耀法師・西大寺玄叡律師、旨其藎也。^{（皆九）}

〔補任1〕^{（八二七）}（天長三年）權律師玄叡（九月十四日任。三論宗

^{（八二七）}（天長四年）權律師玄叡（同日（五月二十八日）轉正）

^{（八四〇）}（承和七年）律師玄叡（月日入滅）

〔具書〕安澄弟子實敏・玄叡、於西大寺弘之。

〔本高5〕和州大寺沙門玄睿傳

釋玄睿、隨安澄在大安寺。通達空論、補西大寺。英博名顯。^{（八二七）}天長四年丁未九月、禁中慶讚藥師佛像。四月八座講

演教義。豐安・載榮・空海・泰演・明福、及叡等、列于講主。中繼・壽遠・實敏・眞圓・道雄等二十員、爲聽法

衆。公卿百僚嚴肅莅事。睿辭義豐、允當天聽。嵯峨帝代、嘗奉詔撰三論大義鈔三卷、以呈進焉。

〔永超錄〕三論大義鈔三卷（西大寺玄叡集）

〔謙順錄2〕三論大義鈔四卷（西大寺玄叡奉勅撰）

〔刻大乘三論大義鈔序〕……天皇皇帝詔于諸家龍象、而令制于各宗要義、奉獻闕庭之日、玄叡大德集三論要襟、而以

上進矣。(正藏)

〔私謂〕玄叡の師承關係について、本書は明確には述べていない。「自爾已後」とあるから、實敏以後のように見えるが、前項で見たように、むしろ實敏の方が玄叡に師事したという記録もあるから、この記述は誤解を招き易い。師資傳・要録では神泰の弟子とする。但し、神泰は福亮の弟子とされるから、それでは餘りに年代が隔たりすぎる。神泰系ということであろう。ともあれ、この方が古い説のようである。具書では安澄の弟子、實敏と同門とし、さらに後代には實敏の弟子とする説も出た(諸嗣宗脈記など。序論参照)。

『大乘三論大義鈔』四卷は現存。いわゆる天長勅撰六本宗書の一。その撰述をめぐる諸問題については、平井俊榮「『大乘三論大義鈔』の著者玄叡について」(前出)を参照。

24 法隆學問寺、昔元弘三論宗。布貴道詮及貞玄律師等、卽法隆寺三論宗也。近代弘法相宗。從昔習學太子三經疏。

近代已來、昌致學業。

。道詮

〔三代實錄8〕(貞觀六年二月十六日)策命云。……傳燈大法師位慧叡・真慧・正進・道昌・道詮・興照・常曉乎法橋

上人位權律師尔任賜比治賜布。

〔補任1〕(齊衡元年)講師道詮(八五四)〈三論宗。法隆寺〉

(貞觀六年)權律師道詮(八六四)〈同日(二月十六日)任。三論宗。法隆寺。已講勞〉

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

(八七三) 權律師道詮 (三月二日入滅)

(元慶元年裏書) 道詮。武藏國人。住大和國平群福貴山寺。修虛空藏求聞持法、得自(然力)智。十二年之間、學一切

經論。貞觀六年二月十六日、僧綱召會議問、依講師勞、可任僧綱也。先以已分僧綱、申讓弟子長賢已講之後、臨維摩會。令參弟子長賢律師。卽至初日、依暮談議、道詮已講、步行參會。爲聞立義、在非聽衆床。爰探題驚啓勅使、請補問者。自今以後奏聞、仍追被任僧綱也。而國史云。伴貞觀六年二月十六日、已任道詮律師了。同十一年(八六四)

正月廿七日、長賢任律師者。又、同補任之中、如此者、可尋歟 (云云)

〔補抄上〕 (貞觀十八年) 權律師道詮 (入滅) 於非聽衆床、講問之談、皆辨決。勅使感之奏聽。卽被補律師。行求聞

持法、得自然智人也。福貴道詮之也。武藏國人也

〔具書〕 玄耀授新元興寺道詮。道詮授長賢律師并眞如親王。

〔元釋16〕 釋道詮、武州人。居法隆寺、學三論。世言於和州福貴寺、修求聞持法得自然慧。貞觀十八年逝。

〔三定〕 齊衡元年 (甲戌) 講師道詮 (法隆寺。三論宗。善達因明。住福貴寺。貞觀六·二·十六、任權律師。後辭退之。同十五·三·二、卒。或十八年云)

〔法隆寺良訓補志集〕 福貴寺道詮傳

福貴道詮和尚、生國者武州。初居法隆寺、學三論無相教。盡二諦八不源曰。四河入海、同從無熱池而出。七宗分鑣、俱從三論而分。三論是七宗之本、諸宗是三論之末。最宗汲太子及惠慈之流、遠照龍樹·提婆之宗義。更兼學眞言、時々行三密。嘉稱彌天下、帝之皇子眞如阿闍梨、歸依而受三論空宗於道詮也。……粵清和天皇御宇、道詮和上見彼上宮墮搆、悲嘆泣血、勵再興意樂、達申忠仁公、益加修覆畢。依之大衆造行信·道詮兩像、安置上宮北

壇。自爾至于今、且夕燈華供及遠忌追福不懈。又道詮在存日、自草建和州福貴寺、使平居荆棘抖擻阿練閣。唯開三學扉、坐禪法空床、自觀法性月。雖實陰遁捷寂而人跡幽、聞法隆學問廢、欲再揚法燈、遍通太子疏義。夏朝往還三經院、妙講讀三經。令被群下見聞貴賤敢歸敬信伏、而調嘲千古、豈遠望西天、方是傳燈聖哲續命法匠也。有時道詮於道貴寺、修求聞持法、得自然慧。世言本地慈尊當成佛、雖於都率天宮鑿閻浮機熟、下生三會曉遙遠、五十六億萬歲、衆生沈冥而忘返。故大悲雲聳風、澎甘露法雨、和光月應感影宿福貴山。終貞觀十八年十月二日、端坐唱滅。于時天紫雲鬣寺、異香薰四方。諸人皆合掌加敬禮云々。

舊記日。齊衡元年十月、以法隆寺道詮律師爲維摩會講師。

或傳。貞觀元年、清和帝召南北碩師二十人於大極殿、講最勝王經。道詮爲第二座講師。(續々群)

〔本高7〕和州法隆寺沙門道詮傳

釋道詮、不詳姓譜。武州人也。承空宗於東大寺玄耀法師。劉覽三藏、追琢四論。住法隆寺四十年、唱本宗之玄致、攝七大寺之衆侶。世傳、詮修虛空藏求聞持法、得自然智。嘗曰。四河入海而止、皆從無熱池而出。七宗分鑣而馳、俱從三論而分。三論七宗之本、諸宗三論之末。弘仁年中、唐遍明法師、齋寄釋摩訶衍論十卷。當時諸師、批評區別。興福寺德溢、述作中往往用之。延曆寺最澄・圓珍、破爲僞論。東寺空海、奏朝入眞言三藏。箴海・道詮、卻破爲僞論、立爲眞論也。嘉祥三年春月、仁明帝召詮受戒、持不殺戒。貞觀元年、清和帝召南北碩師二十人、於大極殿講最勝王經。詮爲第二座講師。詮後退居和之富貴山、深避人事。貞觀十八年、垂八十而化。(以下略)

〔教時諍論(安然)〕又昔戒明大德入唐之時、釋摩訶衍論十卷將來。……後有富貴山道詮、作箴誨迷方記、具會初四次七之失、未釋叡山四種之失。又作群家諍論三卷、廣敍諸宗相承而已。(正藏75)

〔眞言宗教時義1（安然）〕摩訶衍論、昔者戒明和上將來之時、有諸道俗論定僞論。……後有福基和上、箴誨迷方記

中、具會舊人四失七失、論定眞論。（正藏75）

〔永超錄〕四種相違義一卷〈法隆寺道詮撰〉

劫章頌記一卷〈道詮〉

〔謙順錄2〕（同右）

〔私謂〕没年に關し、貞觀十五年説と十八年説がある。生年も不明であるが、本高のみ八十歳で貞觀十八年没とするから、もしそれに従うならば、生存年代は七九七〜八七六である。學系に關しては、具書は神泰系の玄耀の弟子とし、本高もそれに従う。本書はその學系を示さない。教學内容としては、三論を主としながらも、求聞持法など密教にも通じ、さらに、因明や法相にも通じていたことがその著作から知られる。さらに、安然によると、『釋摩訶衍論』の眞撰説を立てたと傳えており、注目される。なお、安然の擧げる『群家諍論』は、眞福寺に現存する『群家諍論撮要』卷上に當ると思われる（『眞福寺善本目錄』六五頁參照）。これは天台の蓮剛『定宗論』（正藏七七）にも引かれており、三論の立場から諸宗を批判したものとして注目される。

。貞玄

〔私謂〕未詳。但し、道詮の弟子長賢と發音が近いので、同一人ではないかと思われる。長賢に關しては、道詮に關する史料のうち、補任元慶元年裏書・具書を參照。他に以下の史料がある。

〔三代實錄6〕^{（八六二）}（貞觀四年正月）八日丁丑、大極殿始齋講如常。以法隆寺三論宗傳燈大師位長賢爲講師。

〔補1〕^(八六一) 貞觀三年 講師長賢 三論宗。法隆寺

^(八六九) 同十一年 權律師長賢 同日正月廿七日任。三論宗。法隆寺

^(八七〇) 同十二年 權律師長賢 九月十五日入滅

〔三定1〕 貞觀三年 講師長賢 法隆寺。道詮弟子。貞觀十一。正。十七。任權律師

〔本高72〕 和州法隆寺沙門長賢傳

釋長賢、不詳本貫。從布貴道詮大德、究中百門三論。雖兼諸宗、專唱空宗於法隆寺。膺維摩會講師。^(八六二)貞觀四年正月
月初八、爲最勝會講師。臨宮論席、對辯無礙。

25 本元興寺、本學三論。遷彼寺於平城京已來、專弘三論。智光・禮光、俱住彼寺。智光授法於靈叡法師。靈叡授之於藥寶法師。藥寶授之願曉律師。此等諸德、皆元興寺三論宗也。

。靈叡・藥寶

〔師資傳〕靈叡法師・品惠法師・神護寺一登法師、受仙光傳。東大寺漸安法師・玄覺法師・元興寺藥寶法師、同受叡公。隆應法師・願曉律師、乃其後也。

〔具書〕本元興寺靈叡法師并品惠法師・神護寺一登法師、受智光。本元興寺藥寶法師・東大寺漸安法師・玄覺法師、同受靈叡。東大寺玄覺初受靈叡、後掛長 八嶋聖皇特降 綸旨、遣唐請益歸朝之後、於東大寺傳通當宗。

〔塵露〕智光下、有靈叡、次藥寶、次願曉律師。

〔私謂〕靈叡・藥寶は傳法上重要な位置を占めるにもかかわらず、傳記上知られることはほとんどない。

。願曉

〔三代實錄8〕^(八六四) (貞觀六年二月十六日) 策命云。……傳燈大法師位最敎・願曉・明哲・光善乎法橋上人位律師尔。

〔師資傳〕^(八四五) (靈叡・藥寶の箇所を見よ)

〔僧補〕^(八四五) (承和十二年) 講師願曉^(八六四) 三論宗。元興寺

(貞觀六年) 律師願曉^(八七四) 同日 (二月十六日) 任。三論宗。元興寺。已講勞

(同十六年) 律師願曉^(八七四) 三月廿七日入滅

〔具書〕 醍醐寺三論宗者、聖寶僧正之正流也。其濫觴天竺震旦十一餘代暫闕之。於日本者、道慈・善議・勤操三代者

大安寺、勤操傳元興寺願曉律師。願曉傳醍醐寺根本僧正藥寶。

〔同〕 本元興寺隆應・願曉・圓宗、同受同寺藥寶并東大寺玄覺。……善議弟子同寺安往并勤操也。安澄弟子實敏・玄

叡、於西大寺弘之。新元興寺願曉・康訓・東大寺空海是也。

〔三定〕^(八四五) 承和十二年講師願曉^(八六四) 興福寺。三論宗。貞觀六年二月十六日任律師。同十六年三月十七日卒^(八七四)

〔本高5〕 和州元興寺沙門願曉傳

釋願曉、從藥寶・勤操二師、研習三論、兼通唯識宗及密敎。官昇僧都、主元興寺、延講學賓。醍醐寺聖寶・元興

寺隆海、就曉受業。撰述甚多。今有因明論義骨三卷也。

〔永超錄〕 最勝玄樞十卷^(八四五) 元興寺願曉撰 三論

因明義骨三卷^(八四五) 元興寺願曉律師。軌疏爲本。見行本二卷

〔謙順錄〕 (法相宗) 最勝玄樞十卷^(八四五) 願曉述

〔金光明最勝王經玄樞序（菅原朝臣）〕元興寺有願曉法師……注集三論宗義、疏以眞諦三藏爲根本、以闡那法師爲枝葉、收拾諸師所記、與此相諧者、皆以補綴、不敢遺漏、勤爲十卷。（日藏・正藏）

（私謂）師資傳や本書では、藥寶を承けたことするが、珍海の血脈などでは勤操の系統にも位置づけられており、これによつて聖寶にはじまる東南院の三論が、智光系・道慈系のいづれをも承けていることが示される。（序論参照）願曉の著述としては、『金光明最勝王經玄樞』一〇卷（日藏・正藏）の他、『大乘法門章』（四卷中卷二・三現存。日藏）、『内外萬物緣起章』（三卷中、卷中現存。日藏）が現存する。特に後者は天地萬物について論じたものとして興味深い。

26 願曉授法於聖寶僧正。聖寶者七大寺之檢校也。以三論爲本宗、兼學法相・華嚴・因明・俱舍・成實。顯宗義途、精覈究暢。祕藏眞言、研覈旨歸。包括之德、無敵對者。

。聖寶

〔紀略後1〕^{（九〇九）}（延喜九年七月）六日前僧正聖寶卒（年七十八）

〔補任2〕^{（八九四）}（寛平六年）權律師聖寶（十二月廿二日任。三論宗。兼眞言宗。東大寺。眞雅僧正弟子。同廿九日爲法務）

^{（八九六）}（同八年）權律師聖寶（法務并東寺別當補了〔柒六十九〕）

^{（八九七）}（同九年）權律師聖寶（十二月廿八日轉任小僧都。東寺別當〔柒法務。七十〕）

^{（九〇一）}（延喜元年）小僧都聖寶（正月十四日任大僧都。〔柒法務。七十四〕）

^{（九〇二）}（同二年）大僧都聖寶（三月廿三日轉任權僧正。〔柒法務。七十五〕）

(九〇〇) (同六年) 權僧正聖寶(へ十月七日轉正。東寺別當。〔法務。八十〕)

(九〇九) (同九年) 僧正聖寶(へ六月依病辭之。勅許之。七月六日入滅)

〔私謂〕その他、聖寶に關する史料は極めて多く、日史1—4、延喜九年七月の條に収録されている。そこで、ここでは三論の相承についてのみ見ると、本書や塵露、また珍海の相承系譜(序論参照)などでは願曉のみを承けたことになつてゐるが、具書・元釋、また聖寶僧正傳などでは、願曉と圓宗の二人から三論を承けたことになつてゐる。圓宗は貞觀十一年維摩會講師、同十二年最勝會講師、同十六年律師、元慶七年小僧都、同年十二月二十二日入滅(三代實錄・補任・三定・本高72など)。圓宗は元興寺の人であるが、具書によると元興寺の藥寶と東大寺の玄覺を承けてゐる。『一乘佛性慧日抄』や本稿でしばしば用いた師資傳の著者である。

27 遂於東大寺建東南院、以爲永代三論本處。即以宣旨元興寺三論知識供、見遷于東大寺。此寺元學三論、八宗兼學、自昔傳來。人王第六十代醍醐天皇御宇延喜五年乙丑、聖寶建此三論本處。

。東南院

〔要錄4〕一東南院

(八七五) 貞觀十七年乙未、聖寶僧正造東南院。檜皮葺、僧房內安如意。藥師堂在東南院內。延喜四年甲子、東大寺別當律

師道義、佐伯氏人也。大安寺丑寅角在佐伯院、本名香積院。仍東大寺南大門東脇、件院移。朝運作一日一夜內。

夫三百 以是當名東南院。同六年、律師造。聖寶僧正本寺大安寺、在流記。別當東南院宛田地了。

南中門

延喜^(九二〇)廿年壬戌、聖寶僧正造中門、供養奏聞公家。招請僧千二百餘人。卽有 勅施物。

〔具書〕〔聖寶〕遂彼大安寺安澄大德以下祖師自筆聖教等、并元興寺三論宗大供文書、一宗相承眞俗典籍、皆以渡于當寺。始住東室、後則於東南院立大經藏安置之。

〔續要錄〕東南院（略）

〔東南院務次第〕當門室者、清和天皇御宇貞觀十七年、聖寶僧正建東南院、則對於弘法大師初興南院（眞言院）、號

東南院也。醍醐天皇御宇延喜五年乙丑、當寺別當道義律師、移大安寺佐伯院於此院、附聖寶僧正。（佛全）

28 補此院主者、乃三國相承三論長者。昔者諸寺之中、三論碩學、以官府宣爲宗長者。東南院主、代々碩德、皆爲其選。至第七十代聖主後三條天皇御宇、殊以東南院務、爲宗長者、所被宣下。

。東南院主

〔續要錄〕東南院

……次三論長者、諸宗三論宗中、殊撰器量、以官符所補來也。而延久^(一〇七二)三年、永以東南院々主、可爲此宗長者之由、被宣旨以來、于今無違禮矣。

〔東南院務次第〕于時 勅補此院主者、乃三國相承三論長者焉。後三條天皇御宇、殊以東南院務爲宗長者、所被宣下。

29 東南院務、聖寶已後于今一十八代、顯密兼學、作宗貫主（但勝賢一代唯密宗）。寺中衆徒、從昔至今、學三論者、竝肩繼踵、互奪金玉、俱諍蘭菊。

。于今十八代

〔塵露〕司彼院務之人、乃爲三論貫主。卽聖寶僧正、延敷僧都、觀理權大僧都、法緣律師、澄心僧都、齊慶律師、有慶律師、慶信法師、覺樹僧都、惠珍僧都、聖慶得業、道慶得業、勝賢僧正(唯密宗也)、定範法印、道快僧正、聖實權僧正、聖兼大僧正、聖忠大僧正。如是相繼經十八代。

〔續要錄〕第十七代まで記す。但し、第六代は濟慶、第十七代は聖憲。第十五代まで、出自と没年月日を記す)

〔祖傳集〕第三十三代まで記す。但し、第六代は濟慶。又、第十五代として法親王道深がはいり、道快(16)、聖賢(17)、聖憲(19)、聖兼(20)と、二代ずつずれている。第十二代道慶まで詳しい傳あり。以下、一部のみ簡單な傳あり)

〔祖師傳〕祖傳集とほぼ同じなるも、第四代信緣、第十二代通慶、第十六代通憲、第十七代聖實)

〔東南院務次第〕第三十七代まで記す。但し、第三代に濟高、第十六代に道深が加わり、以下、道快(17)、聖實(18)、聖兼(19)、聖忠(20)と續く。第七代は濟慶。傳あり)

〔私謂〕十八代の數え方は同じ凝然の塵露章に従うべきことは勿論であるが、上掲の諸史料の間でもかなり代の數え方が違うことが知られる。第十八代(塵露章による)の聖忠は醍醐寺座主・東大寺別當・東寺長者にもなった人で、文保三年五十二歳で入滅(祖師傳・院務次第)。その前代の聖兼は永仁元年没であるから、年代的にも傳通緣起執筆(應長元年)と合う。

。勝賢

〔續要錄〕第十三代權僧正勝賢

俗姓藤氏中納言通憲子

建久八年六月廿二日入滅〔年□□〕
(二九七)

〔祖傳集〕(二三)僧正勝賢〔俗姓藤原氏。通憲息。建久八年六月廿二日〕

道慶讓權僧正法印大和尚勝賢。〔醍醐〕座主也。文治五年七月十五日、得道慶讓補院主職畢。
(二八九)

〔祖師傳〕三寶院權僧正勝賢。少納言通憲入道信西之子。保元三年十二月二十九日、任律師。(二二七)仁安二年正月、任少僧

都。治承三年正月十四日、敍法印。元曆元年八月十日、任權僧正。文治三年七月十五日、受道慶之讓而主此院。
(一七九)

建久元年、後白河上皇國例留駕於斯院。三年十月八日、爲東大寺貫首。七年六月二十二日寂。五十九歲。號覺洞

院。

〔東南院務次第〕(略。祖師傳より詳細)

〔私謂〕勝賢の傳は日史4—5、建久七年六月二十二日條に集められているが、東南院關係のものは收められていな

いので、ここに掲出した。

30 永觀・珍海・樹朗・重譽、竝中古學英、乃智解鸞鳳也。

。永觀

〔私謂〕永觀の傳は日史4—5、天永二年十一月二日條に收録されている。同日没、七十九歲。權律師、前東大寺別

當。三論教學上の系譜では、珍海口傳・露塵章・諸師宗脈記など、いずれも顯眞(有慶の嗣)を承けている。顯

眞は詳しい傳記は知られないが、本高11・有慶傳に附載、「又釋顯眞、承三論於有慶、兼質法相・密教。從事律範、好隱混衆、居東大寺、講經說論、警策學賓」とある。

永觀は三論教學上の事蹟は知られるところが少ないが、淨土教家として名高く、『往生拾因』『往生講式』などの著述も現存し、研究も進んでいる。筆者もまた永觀の著『阿彌陀經要記』の逸文を集めて發表したことがある（印佛研二五一）。

。珍海

〔字槐記抄中〕^(一五二)（仁平二年十一月）廿三日、今曉、東大寺已講珍海^(一五二)（年六十二）入滅。依寸白也。斯人三論・因明之英才也。可悲可惜也。

〔本朝世紀44〕（仁平二年十一月二十四日）去比、珍海已講入滅（云云）。三論之碩學也。

〔平遣5〕〇二四〇一 元興寺領某莊檢用帳

^(三八)
（保延四年十二月十五日）

鎮學頭大法師「珍海」

〔同6〕〇二四五二 東大寺牒案

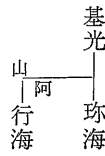
^(三四)
（永治元年十月廿九日）

三會已講

傳燈大法師珍海

〔尊卑分脈〕（魚名公孫）

繪師
三論宗
已講
東大



〔塵露〕樹公下、有珍海已講・重譽上人・觀嚴大法師等。

〔三定〕（永久三年）^(一一五) 豎義東〈靜順・珍海〉

康治元年〈壬戌〉講師珍海〈東大寺三論宗〉

〔本高12〕和州禪那院沙門珍海傳

釋珍海、延臣園基光之子。早從覺樹究其背紫。器度清敏、好問於人。研核華嚴・法相・因明、歷三會講。每登師席、詞鋒俊利、莫敢當者。時人僉曰、文珠應化也。仁平年中住禪那院、講法華・維摩・勝鬘經。暨于暮年、又修淨業。選淨土義私記・決定往生集・淨影義章。珍善丹青、與傳法院覺鑊、有割席之遇。畫金剛界大日像、以贈之。余抵禪那院、瞻禮寫照。鼻頭隆準、口角方廣。仍知其異人也。

〔圓光大師行狀畫圖翼贊58〕（略）

〔淨土源流〕東大寺三論珍海已講、兼研淨教。撰決定往生集一卷、淨影義章作淨土義私記二卷。

〔長西錄〕決定往生集一卷 珍海

大乘義章淨土義私記二卷〈九十丁〉 珍海〈注大乘義章也〉

悉檀抄第一 珍海〈延曆寺已講〉

菩提集一卷

珍海

〔大乘正觀略私記〕(奧) 長承三年正月十五日 沙門珍海私記

〔三論玄疏文義要10〕(奧) 保延二年七月一日抄竟 自天承之比時待暇隙兩三子之間抄之。近日分卷

三論學沙門珍海記之

口傳血脈(略。本稿序論參照)

〔大乘玄問答1〕

大乘玄問答第一〈二諦義上 玄第一上〉

禪那院越前已講珍海抄

〔一乘義私記〕(奧) 保延六年六月二十二日酉時也〈云云〉

永萬元年晚夏之比、以草本書之。此私記者故禪那院已講所被草也……

三論末學明遍記之

〔八識義章研習抄上〕(奧)〈寫本云〉保安元年十二月二十九日刪削畢。去年爲御堂豎義所抄〈云云〉

以此善根力 往生安養奉觀彌陀

慧眼開明達見佛性矣

珍海〈生年二十九〉

〔同中〕(奥) 元永二年月日 爲記持録之
(一一二九)

保元二年正月十五日刪削畢 珍海
(一一五七)

(保元二年ハ保安二年ノ誤リカ)
(一一二二)

〔菩提心集下〕(奥) 大治三年(歲次戊申)八月六日 沙門珍海書記
(一一二八)

〔決定往生集〕(奥) 保延五年三月二十一日、病中抄畢。康治元年三月十二日、重治定了東大寺珍海作(云云)
(一一三九)

〔安養知足相對抄〕(奥) 久安二年三月九日抄畢 末學珍海
(一一四六)

〔私謂〕後の系譜圖ではしばしば永觀―珍海と結ばれるが、塵露章・本高等によると覺樹の弟子のようである。覺樹は第九代(院務次第では第十代)東南院主。保延五年没。(一一三九)祖傳集・祖師傳によると五十九歳、院務次第・本高12によると五十六歳。珍海とそれ程年が離れておらず、疑問が残る。珍海の著書は多く現存し、いずれも正藏に收められてゐる(但し、菩提心集のみ淨土宗全書)。奥書等のあるものは掲出したが、現存書の書名・卷數を示しておく以下通り。

因明大疏四種相違抄 一卷

大乘正觀略私記 一卷

三論玄疏文義要 十卷

大乘玄問答 十二卷

一乘義私記 一卷

八識義章研習抄 三卷

三論名教抄

十五卷

決定往生集

一卷

安養知足相對抄

一卷

菩提心集

二卷

なお、『俱舍論明眼抄』二卷（佛全所收）も珍海の著作かと言われている。

珍海は永觀と並んで院政期の三論淨土教を代表する存在でもある。次の樹朗・重譽もやはり淨土教の信仰者でもある（但し、樹朗は古い史料に記載がなく、問題が残る）。又、珍海の師とされる覺樹にも『十二禮疏』一卷があつたという（長西録）。南都三論宗の淨土教については、井上光貞『日本淨土教成立史の研究』参照。

。樹朗

〔維摩會方例考〕長（一六四）寛二年、樹朗擬講。（佛全）

〔塵露〕圓快下、有理眞律師、樹朗已講等。

〔本高12〕（重譽傳附載）

又同時有樹朗。稟空宗東大寺理眞律師。住東南院、開講三論。與譽並名、稱當世鸞鳳也。晚結精舍、捨所業、修淨利矣。

。重譽

〔平遺6〕〇二五一六 重譽房地田地配分狀……

右件房地并田者、本師慶賢五師之手、重譽大法師傳領年尙矣。而重譽大法師、今年春之比、被相語云、以所領田畑等、欲處分門弟。但我平生之時、可自筆書置。至入滅後、可令分與云云。即去三月十二日、被書置畢。同年六月十四日、不慮之外受重病。同月廿五日入滅。……

(一四三)
康治貳年六月廿八日

〔塵露〕〔珍海の項參照〕

〔淨土源流〕彼世同有光明山重譽大德。即三論碩匠也。兼研密藏、歸投淨土、撰西方集卷三。

〔本高12〕和州光明山沙門重譽傳

釋重譽、不詳姓系。從覺樹於東南院、研鍊三論、兼通密藏。厭黃衆之交、入光明山、從事淨業、終于所住。著西方集三卷。

〔平遺・題〕〇一五〇九 祕宗深嚴抄一帖（金澤文庫藏）

（奥）

(一三八)
保延四年仲秋之比於光明山記之

沙門重譽

〔長西錄〕西方集三卷 重譽（理法房珍海三海月法兩人覺樹大僧都弟子）

31 明遍・貞敏・秀慧・覺澄、俱近代名哲。是學識玉鏡也。

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

。明遍

〔塵露〕珍海下有敏覺法印、次明遍僧都。

〔私謂〕日史5—2、

(二三四)

元仁元年六月十六日條に傳記收録。同日没、八十三歳。藤原通憲の子。はじめ東大寺に三論を

學んだが、光明山に隠れ、さらに高野山に入つた。法然とも交流があり、隱遁の念佛聖として名高い。三論の受法については、塵露章や法然上人行狀繪圖では敏覺の嗣とし、本高13では敏覺・明海を承けたとする。

。貞敏・秀慧

〔塵露〕次明遍僧都、次慧敏・貞敏僧都。……理眞下有頼慧法印・定範法印・道慶得業・秀慧擬講・重喜律師等。

〔私謂〕いづれも傳未詳。

。覺澄

〔塵露〕秀慧下、有覺澄阿闍梨・樹慶得業等。

〔圓照行狀中〕知足院□房、號性舜、諱覺澄矣。法相宗學者、於法華玄贊・上生疏等研覈精詳、大小戒律、探蹟獲

奧、照公隨澄公、受學玄贊、一乘宗旨、獲其源底、澄公有甥、房號本行、澄公以院宇、讓付于彼、行元讓之照公。讓付之儀、源由受法于澄公焉。

〔本高15〕和州知足院沙門覺澄傳

釋覺澄、號性舜。從少辭親、遍遊南京諸寺。習貫法相、旁通餘部。其中所最、法華玄贊・上生經。削玉研光、大

小戒律、索隱記顯。建長年中、住知足院、一夏隨請、講說玄贊。圓照・證玄、一時羣英、抱表列筵。自爾所開

席。若干不詳其所亡焉。

〔私謂〕圓照行狀・本高では法相宗となつており、同一人と言えるかどうか不明。なお、平遺6―2061、7―2495、題189・191・354、鎌遺3―244、8―56、10―277にも覺澄の名が見え、要検討。

32 厥後、樹慶・智舜・快圓・定春等、繼踵騰旨、不可勝計者也。

。樹慶

〔塵露〕重喜下、有義海得業・乘信僧都・樹慶得業等。

〔私謂〕傳未詳。

。智舜

〔平遺・題〕〇四七七 唯識義章一卷（高野山金剛三昧院）

（奥）

寛治二年四月三日僧延快寫了
（二〇八）

* 「門弟僧良覺給之」

** 「傳領三〇完沙門智舜」

塔本相傳之内也

〔圓照行狀中〕文永六年己巳、請光明山智舜上人、於戒壇院令講三論。住寺僧衆七十許人、多是方來學法英哲。……
（二六九）

『三國佛法傳通緣起』日本三論宗章研究

(二五七)
正嘉元年夏安居中、有海龍王寺僧常住道號照寂、寄住戒壇、聽於知足院、智舜上人講中論疏。

〔同〕覺靜房適然……後就智舜上人、習學三論。正嘉元年、聖守上人、請光明山智舜上人、於知足院令講中論疏……

〔同〕禪空房如性……隨智舜上人、學三論宗法華義疏等。

〔同下〕本妙房見塔……隨智舜上人、受學三論。

〔塵露〕樹慶下、有道快僧正・智舜法師等。

〔本高15〕和州東大寺沙門智舜傳

釋智舜、其生緣姓牒未詳之。早遊南京、綜研八宗。從東南院樹慶、承嗣空宗。補任僧都。初在東大、專說三論、

後移和之光明山。四方學賓、蟻聚山房。正嘉元年、中道守公爲衆延請、因講中論於知足院。七大寺學侶、及海龍

王寺照寂・淨禪・覺淨・白毫寺入圓・實教・禪林寺生觀・觀聖・唯心、在京英俊、執卷承旨。文永六年、實相照

公、招講三論於戒壇院。重禪・聖然・見塔・道明、七十餘員、皆是當世聞人。旋進求益、亦講筵之一盛會也。凡

學空宗者、靡不受其教誨也。不記謝世之地。有門弟九人。聖然・證禪等、能唱師道矣。

〔私謂〕智舜については、平井俊榮「鎌倉時代の三論教學」（金澤文庫研究269）参照。それによると、東大寺圖書館

藏『中觀論疏』寫本は智舜書寫本からの轉寫本であり、また弘長三年の智舜書寫『勝鬘寶窟』も現存するといふ。

。快圓・定春

〔塵露〕舜公下有快圓已講・定春法印・良秀律師等。

〔圓照行狀中〕正嘉二年初冬、照公將談業疏、而前方便請東大寺名哲信禪・決圓・定春三德、令講俱舍業品疏。

〔本高15〕和州東大寺沙門定春傳快圓

釋定春、及年舞勺、出家於東大寺、從東南院樹慶、學練空論。立破從橫、兼精于俱舍論。在後嵯峨帝御宇、聲高朝野。又同時有釋快圓。隨智舜于東南院、受三論旨。雖空破於諸相、而精詳七十五法。常在東大、與定俱名。時人連稱曰空宗之龍蛇、俱舍之麟鳳也。

〔私謂〕定春について、塵露は智舜の門下とするが、本高は樹慶の門下としている。鎌倉中期の三論復興としては、むしろ『三論玄義檢幽集』七卷（一二八〇）を著わした澄禪や、東大寺に新禪院を興した聖守・聖然らが注目される（平井、前掲論文参照）が、凝念は彼等には觸れていない。